

松本平の発掘を 語る。



松本市立考古博物館リユース記念シンポジウム報告書

松本平の発掘を語る。



松本市立考古博物館リユース記念シンポジウム報告書



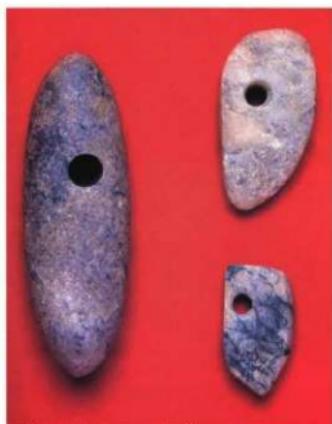
1 パネリストの先生方



2 シンポジウム会場風景



3 上原遺跡環状列石



4 淀の内遺跡出土ヒスイ垂飾



5 一津遺跡出土ヒスイ原石



6 エリ穴遺跡全景（画面中央左が重要文化財馬場家住宅）



7 エリ穴遺跡出土土製耳飾



8 弘法山古墳全景



9 弘法山古墳発掘風景1（昭和49年）



10 弘法山古墳発掘風景2（昭和49年）

ごあいさつ

松本市中山地区は、かつては100基を超えるといわれた中山古墳群、古代の御牧である埴原牧、中世の山城としては屈指の規模を誇る埴原城など、遺跡の多い地域として知られています。

そうした背景のもと、地域の皆さんのが持ち寄った遺物を展示した中山考古館が、昭和6年、中山尋常高等小学校の一室に設けられました。その後、昭和29年の旧中山村の松本市合併に伴い、昭和32年に中山小学校敷地内に展示施設が新設されています。

昭和61年には、中山のみでなく松本市内全域の埋蔵文化財を収蔵展示する施設として現在の施設が当地に建設され、松本市立考古博物館が開館しました。

開館当初から、中山出張所・公民館と併設された形態で運営してきましたが、平成14年3月に中山出張所・公民館が隣接地に移転、新築されたのに伴い、これを機に施設及び展示を改修し、平成16年4月にリニューアルオープンいたしました。

この間、施設の改修、展示のリニューアルに留まらず、今後の考古博物館のあり方について専門家の意見を求めるため、「松本市立考古博物館のあり方懇話会」を設置し、6名の先生方から貴重なご意見をいただきました。

本書は、そのリニューアルオープンを記念して、伝統ある「あがたの森考古学ゼミナール」の平成16年度第1回講座として開催したシンポジウム「松本平の発掘を語る。」の全容を収録したものです。

樋口昇一先生、桐原健先生を始め、松本平を代表する考古学の研究者の皆様にお集まりいただき、各時代別にこれまで発掘した主要な遺跡や、考古学上の重要な成果について、解かりやすく解説いただきました。

この価値ある内容を記録した本書を、松本市立考古博物館の開館20周年の節目に刊行できることは、松本市教育委員会にとりこのうえない慶びであり、郷土の歴史や文化を愛する多くの皆様に活用していただければ、ありがたく存じます。

平成17年3月

松本市教育長 竹淵公章

目 次

卷頭図版	3
ごあいさつ	7
謝 辞	9
凡 例	10
出席者紹介	11
シンポジウム本文	12
遺跡一覧表	39
遺跡分布図	47
資 料	57
松本市内の遺跡発掘の歩み	65
掲載写真・図版一覧	70

表紙絵：菊池 直哉

謝 辞

シンポジウム開催及び報告書作成にあたり、下記の関係機関、先生方にご指導、ご協力を賜りました。
ここにお名前を記し、深く感謝の意を表します。(敬称略)

長野県立歴史館
長野県埋蔵文化財センター
明科町教育委員会
大町市教育委員会
塩尻市立平出博物館
豊科町教育委員会
穗高町教育委員会
山形村教育委員会

あがたの森文化会館

桐原 健
樋口昇一

大澤 哲
小林康男
島田哲男
山下泰永
山田真一
和田和哉
直井雅尚

凡 例

- 1 本書は、平成16年7月3日（土）にあがたの森文化会館で行なわれた、松本市立考古博物館リニューアル記念シンポジウム「松本平の発掘を語る。」の全容を収録したものである。このシンポジウムは、第26回あがたの森考古学ゼミナールの第1回講座として開催された。
- 2 シンポジウム本文は松本市教育委員会が録音したものを文章化し、細部について各発言者から了解を得たうえで文意を損なわない程度に修正した。
- 3 本書に収録した遺跡一覧表と遺跡分布図は、当日参加者に配布した資料と同じものであり、遺跡一覧表は若干の修正を加えた。
- 4 本文中に示された遺跡については、カッコ内に遺跡一覧表に記載した遺跡番号を付記した。
- 5 本文中の字句について解説が必要と思われるものは、本文末に註記した。

出席者

コーディネーター

樋口 異一（ひぐち・しういち）
昭和7年（1932）東京都生まれ
國學院大學文学部史学科卒業
現在 長野県遺跡調査指導委員会委員
住所 松本市寿台6-7-2

桐原 健（きりはら・たけし）
昭和8年（1933）長野県生まれ
國學院大學文学部史学科卒業
現在 長野県考古学会会長
住所 松本市旭2-4-12

パネリスト

小林 康男（こばやし・やすお）
昭和24年（1949）長野県生まれ
明治大学文学部史学地理学考古学専攻卒業
現在 塩尻市立平出博物館長
住所 長野県塩尻市広丘吉田166

大澤 哲（おおさわ・さとし）
昭和28年（1953）長野県生まれ
佛教大学文学部卒業
現在 明科町役場 水道課課長兼下水道課長
(前) 明科町教育委員会文化財係係長
住所 長野県東筑摩郡明科町大字中川手104-1

島田 哲男（しまだ・てつお）
昭和34年（1959）長野県生まれ
佛教大学通信教育部文学部卒業
現在 大町市文化財センター所長
住所 長野県南安曇郡豊科町大字高家6738-9

山田 真一（やまだ・しんいち）
昭和37年（1962）長野県生まれ
早稲田大学教育学部教育学科卒業
現在 豊科町教育委員会社会教育課副主幹
住所 長野県南安曇郡豊科町豊科113

山下 泰永（やました・やすなが）
昭和37年（1962）長野県生まれ
立正大学文学部史学科卒業
現在 稲高町教育委員会生涯学習課主任
住所 長野県南安曇郡豊科町4596-5

和田 和哉（わだ・かずや）
昭和47年（1972）長野県生まれ
奈良大学文学部文化財学科卒業
現在 山形村教育委員会主任
住所 長野県南安曇郡三郷村明盛5029-8

直井 雅尚（なおい・まさなお）
昭和33年（1958）東京都生まれ
信州大学教育学部卒業
現在 松本市教育委員会文化財保護課主査
住所 東筑摩郡山形村7039-4

1 「開会の挨拶」

司会：定刻となりましたので始めさせていただきます。私、本日の司会を担当させていただきます考古博物館の桑島と申します。よろしくお願ひします。本日はお暑い中、多数の皆様にご参加いただきましてありがとうございます。只今から、考古博物館リニューアル記念シンポジウム「松本平の発掘を語る。」を開催させていただきます。はじめに主催者を代表して考古博物館長川上百合子がご挨拶申し上げます。

館長：こんにちは。考古博物館長の川上百合子でございます。主催者を代表して一言ご挨拶を申し上げます。今年の春4月17日に松本市立考古博物館がリニューアルオープン致しました。このリニューアルオープンを記念して、「松本平の発掘を語る」と題して、シンポジウムを開催することになりました。

松本市では、開発事業に伴う緊急発掘の増加や松本城二の丸等の学術発掘などで、日々発掘に追われる毎日でございます。そんな中で、松本市立考古博物館が建物改修や常設展示の一新に伴い、過去の発掘について概観してみてはいかがかと思ったのがこの会の発端でございます。また、昭和54年から始まって今年で26回目という伝統ある「あがたの森考古学ゼミナール」という場で、ご多用中の樋口昇一先生と桐原健先生をコーディネーターとしてお迎えし、また、松本平の各教育委員会の協力を得て、盛大に開催できることを心より感謝申し上げます。本日は短い時間ですが、このシンポジウムが、皆様の何がしかのお役に立てばと考えております。コーディネーターの先生方、パネリストの先生方どうぞよろしくお願ひ致します。簡単ではございますが、ご挨拶にかえさせていただきます。

司会：つづきまして、本日シンポジウムにご参加を頂きます先生方をご紹介させていただきます。

館長：では、お席の順にご紹介いたします。皆様の正面から向って右側から、樋口昇一先生です。先生は長野県文化財保護審議委員会委員で、松本市でも大変お世話になっております。次に桐原健先生です。先生には、今回の考古博物館あり方懇話会⁽¹⁾の代表として改修にご尽力いただきました。現在長野県考古学会会長の要職についておられます。次にパネリストのご紹介に移らせていただきます。小林康男先生です。先生にも、当館の改修にあたり懇話会の委員としてご尽力いただきました。現在は、塙尻市立平出博物館の館長でございます。次は、明科町役場の大澤哲先生です。先生は前明科町教育委員会文化係係長として、文化財行政にご尽力いただいております。次に大町市の島田哲男先生です。先生は現在大町市文化センター所長でございます。次に農科町の山田真一先生です。先生は現在農科町教育委員会社会教育課に勤務されております。次に穂高町の山下泰永先生でございます。先生は現在穂高町教育委員会生涯学習課に勤務されております。次の山形村の和田和哉先生は昨年まで職員研修で松本市の発掘をお手伝いいたしました。現在は山形村教育委員会に勤務されております。最後になりましたが、松本市を代表しまして、松本市教育委員会文化課直井雅尚でございます。本日は、この先生方でよろしくお願ひ申し上げます。

司会：ありがとうございました。では、マイクを樋口先生にお渡ししたいと思います。先生よろしくお願ひ致します。

樋口：皆さんこんにちは。本日はこんなに大勢に来ていただいてありがとうございます。今日のシンポジウムは「松本平の発掘を語る」というテーマになっております。松本平の考古学のあり方や今日までの成果と今後の課題、そういうものも理解して帰っていただけるような会にしたいと思います。コーディネーターは私と桐原君でやりますが、うまくいかかどうか正直言って心配しております。何かわからないところは、後の質疑で遠慮なくしていただきたいと思います。

2 「概観」

樋口：はじめにですね、旧石器・縄文時代から入っていきますが、松本平の発掘の歴史について簡単に話しておきます。明治から昭和の初めにかけての発掘なんていうのは、ほとんど地元でやるのはなくて中央から有

名な学者、例えば鳥居龍藏^②先生をはじめとする先生方が来るだけで本格的な発掘というものはあまりありませんでした。やはり本格的な発掘調査というのは戦後から始まるわけですが、特に松本平では、平出遺跡がその中で全日本の意味で大きなひとつの歴史を残してくれたわけですが、その当時、地元には研究者の方々がたくさんおられました。特にもう亡くなられてしましましたが、一志茂樹先生をはじめとして原嘉藤先生、深志高校の藤沢宗平先生、博物館におられました小松慶先生、さらに蟻ヶ崎高校におられました中島農晴先生、そういう高校の先生、あるいは博物館の方々が指導した高校生中心の発掘が非常に盛んで、その中でも、私の隣におります桐原君なんかが昭和20年代から、松本平の考古学を常にリードしてきたというような状況です。その中で平出の発掘を契機として、ようやく松本平の考古学的な発展が始まります。ところが、高度経済成長時代になってきましたら、発掘がだんだんだんだん大規模になります。少なくとも昭和30年から40年代の発掘は「日曜考古学」といいまして、土曜日か日曜日に行ってちょっとトレンチをあけて掘るというような小規模な線的発掘だったんですが、もう昭和40年代後半からはじまるこの高度成長の結果、面的な発掘が多くなって、松本平でもどこでも大きな発掘がどんどん行われるようになってきました。そうしますともう個人的な力ではどうしようもないということで、それぞれの地方自治体の教育委員会が主体となる発掘が各地で行われるようになりました。この現象は松本平だけじゃなくて日本全国が同じような情勢となつたわけですが、例えば、今までは1軒か2軒の住居址を掘っていた発掘が、一挙に50軒や100軒というような発掘調査が当たり前となりました。そういう全国的な波が数年前まで続いていましたが、ようやく最近落ち着いてきまして、やや発掘件数は全国的に見ても少し下降気味です。

しかしながら、この松本平では依然として松本市も塩尻市も、他の市町村も年に何回かの発掘で新しい資料をどんどん蓄積しているという状況です。本当は発掘といふものは、学術発掘といって目的をもって発掘するのが当たり前なんですが、もう今の日本ではそういう発掘は1%ぐらいしかなくて、あと99%は、なんと緊急発掘といって、工場を建てるとか、道路をつくるからという発掘になってしまっています。まあこれは正しい姿じゃないと思うんですが、いずれにしましてもそういう大規模発掘がどんどん続いている中で、この松本平ではどのような成果が得られたのか、そして今後にどういう課題を持っているのかということをこれから話していきたいと思います。

3 「旧石器時代」

樋口：それでは、はじめに日本の歴史からいくと一番古いところは旧石器時代なので、そこからはじめていきたいと思います。実は松本平は旧石器時代の遺跡が少ないんですね。長野県で最も少ないところです。こちらの地図（遺跡分布図-1、以後、図-Oと表示）を見ればお分かりだろうと思います。地図のほうの1ページ目に旧石器時代の遺跡の分布図が載っているんですが、遺跡があるのは、ほとんど塩尻の一部分だけです。なぜ旧石器時代の遺跡が無いんでしょうか。今まで旧石器関係で掘っているのは塩尻だけですが、小林さん、あの塩尻の旧石器もそんなに大きな遺跡というわけではないですね。どうですか。

（塩尻市和手遺跡）

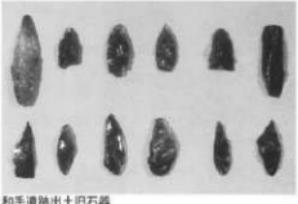
小林：その一覧表がありますが、一番大事な遺跡がちょっと落ちてしまっています。一覧表の下に和手という遺跡を是非書き加えてください。所在地は広丘高岡になります。今、樋口先生がおっしゃったように、和手遺跡の旧石器が発見されるまでは、それほど大きな旧石器時代の遺跡は無いだろうと思われていたんです。和手遺跡は、平成6年～8年に発掘されたんです。場所は、高岡という国道19号と20号の交差点の周辺です。今カーバークですかカインズホームなんかが建っている場所が遺跡ですが、ここでの発掘調査で201点の旧石器時代の



樋口昇一氏



小林康男氏



和手遺跡出土旧石器

遺物が発見されました。特にその中では、ナイフ型石器という石器が26点、それから槍先型尖頭器、「石槍」ですけれども、それが6点、そのほかにも石くずみたいなものが結構広範囲から、しかもローム層中からも発見されました。今まででは、あまり大きな遺跡は無いかなあと思ってたんですが、どうも田川の上流域ぐらいの所には少しまとまつた旧石器時代の遺跡、痕跡があるかなと最近は思はじめています。なお、塩尻の丘中学校敷地も有望な遺跡です。

(松本平に旧石器遺跡の少ない理由)

樋口：はい。それから発掘している自治体の人たちには申し訳ないんですが、実は旧石器がたくさん出ないとということにはひとつ理由があるんです。松本平で発掘すると、だいたいローム層以下を掘りません。ローム層を掘りくぼめて住居址が出てくるので、その下を掘るということはほとんど無いんです。もう松本平には旧石器があまり無いだろうという先入観がありますから、そしてまた労力もかかりますから下を掘らないんですね。旧石器というのはあの赤土のローム層の中から出てきますから、あまり出てこないわけです。今小林さんが和手遺跡の話をしましたが、たまたま和手ではそういうものが上のほうに多少出土したからある部分だけ掘りましたが、ほとんど掘ってない。やはりこれがんまり松本平には旧石器が無いということのあらわれかなと思うんです。あとこれは私がやりましたが、青木湖のクマンバ遺跡^⑯でもそれらしいものは出てるんです。ちょうど野尻湖と同じようですね。渴水期になりますと、湖底が露呈しまして、その干上がった所から旧石器が少し出てるんですが、これは正式な発掘をしていませんので分かりません。いずれにしましても、旧石器時代はどうも松本平で今話題にするほどのことはないんじゃないかというわけで、このくらいにしておきたいと思います。

4 「縄文時代」

樋口：それではいよいよ、一番問題の多い縄文時代に入りたいと思います。縄文時代は皆さんご存知のように一万三千年以上も続いている長い時代ですから、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期と6期区分という細かい分け方がありますので、ひとつずつその話題を追っていきたいと思います。

樋口：一番はじめの草創期ですが、この期の発掘は、松本平には1件も無いですね。これも珍しいんです。長野県内でもあちらこちらで草創期を掘っていますが、松本平はどうも草創期が今まで一度もあたらない。ですから旧石器以来の遺跡の少なさっていうのは草創期まで続いているわけです。今この草創期の遺跡は、日本全国で発見されていますし、その中の一番古い土器は、例の炭素14年代測定法^⑰の新しい研究では、青森県からは一万六千年前じゃないかなんて言われている土器も出ているわけです。ところがどうもこの松本平は草創期があまり無いんです。この前、埋文センター^⑯で掘りました野尻湖の遺跡、貫ノ木遺跡でしたか、その土器は一万三千年は間違いないと言われているわけですね。そういう草創期があんまり無い、やはりこれは我々この地元にいる研究者達の怠慢かもしれませんが、今後に期待をしたいと思うわけです。ところが次の早期になりますとですね。

樋口：ようやくこの松本平の各地でいろんな遺跡が出てきて、おもしろい話題を提供してもらいます。最も新しい発掘成果では、大町市の山ノ神遺跡（図-1 △3）、これは県の埋蔵文化財センターで掘りました。島



島田 前興氏

田さんにちょっと簡単に、どういう遺跡でどういう点が面白かったのかということを報告していただきたいと思います。

(大町市山ノ神遺跡の配石遺構とトロトロ石器)

島田：大町市の山ノ神遺跡は住居と配石遺構があり、配石遺構には2種類あって、集石炉という料理など生活関係の遺構と、もう1つ方形配石（11m×9mのコの字上面に石を並べた）という興味深いものがあります（資料-1）。そういう生活全般にわたる集落の遺跡で、日本全国の中でも有数な位置を占めるであろうと言われています。その中でもコの字型になった方形配石跡は、九州の熊本に1箇所あるくらい

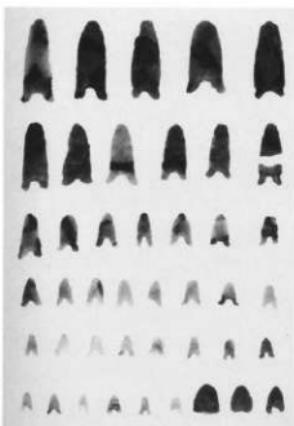
で、全国で2例目になります。それから資料に書いてあります「異形部分磨製石器」ですが、これは何に使われたかは分かりませんが、通称「トロトロ石器」と言います。なぜトロトロ石器というかというと、表面がつるつるしていて、とろけるようだということです。トロトロ石器というわけですが、全国で約100点出ていますが、そのうち41点がこの山の神遺跡で出たという、早期としては大規模で特殊な遺跡です。

矢口：今トロトロ石器の話が出ましたが、ちょっとホワイトボードが無くて形を図示できなくて残念ですが、この石器は石鎚を大きくしたようなのですが、石鎚みたいに先が尖ってなく丸いんです。だから弓矢を使ったとは考えられないんですね。人や動物を刺すようなものではないという非常におもしろい形をしている、それが大量に出たということ、それから、石積みなんかでおもしろいものがありまして、実は9月26日に明治大学の戸沢充則先生と國學院大學の小林達雄先生という縄文の大家が来て大町でシンポジウムをやります。ですからこれも皆さん楽しみにしていただきたいと思います。あづみの国公園^④があそこにできるご存知ですね。大町・松川・堀金一帯に大きな公園化計画があるんですが、そこで発見された遺跡ですから、その遺跡をどういうふうにこれから活用していくかということでシンポジウム^⑤が行われます。是非これに参加していただきたいと思います。

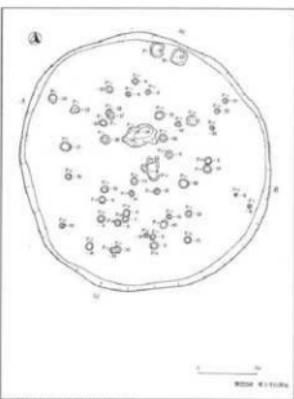
この時期の縄文土器は「押型文」といいまして、長野県には多いんですが、実は松本にも塙尻にもあるんです。松本で初めて出土した押型文の遺跡は、内田にある松本カントリークラブのゴルフ場にあります。五斗林遺跡（図-1 △6）という小さな遺跡ですが、そういうところからも出ております。一方、塙尻市では、非常に大きな住居址を伴った押型文のいい遺跡があります。その成果について塙尻市の小林さん、向陽台を例にしてちょっと報告していただけませんか。

（塙尻市向陽台遺跡の早期前半の大型住居）

小林：今話題になりました向陽台という遺跡（図-1 △11）ですが、塙尻インターに入るちょっと手前の西側の今国道20号の下になっているところにあった遺跡です。ここでは、縄文早期前半の押型文を主体に出土する住居址が出土しました。住居の跡が4軒出して、その内の3号住居址は直径が9mもある非常に大きな竪穴住居でした。それと土坑という直径が1m、深さが50cmくらいの小さな穴が30ヶ所、それから集石炉といいまして石を集めて火を焚いた場所ですね、それが4ヶ所発見されたんです。この向陽台が発見されるまでは押型文の時代のこんな大きな住居が発見されるということは無かったですし、しかもほとんど住居の跡も発見されないという状況でした。ところが、この向陽台でこれだけすごい住居が発見され、しかも貯蔵用か、食料を貯めるための穴かなと思われるような小さな土坑も幾つか発見されたことから、おそらくこの頃から定着的な集落、定住的な集落がはじまったのではないかと考えたわけです。ただですね、この大きな住居の中には火を焚いた場所、炉の跡が無かったわけです。火を焚いて調理をする場所というのは住居の外、4ヶ所の集石炉がたぶん火を焚いた調理の場所だらうと考えました。そこから浮かび上がってくる姿というものはどうもこの向陽台に住んでいた人々っていうのは、各住居単位の生活ではなくて集落全体の生活が主で、家族の独立といふんですかね、そういうものはまだ認められないような時代だったのではないかなというような考え方を持ちました。ちょっと時期が下りますけど、今は県の教育センター^⑥になっている片丘の南内田に矢口と



山ノ神遺跡出土トロトロ石器



向陽台遺跡第3号住居址



向陽台遺跡集石炉

いう早期の最終末期の遺跡（図-1 ○15）がありますが、そこでは、住居の中にしっかりとした炉が作られていましたので、早期の終り頃からは各家族の独立ということもあったのかなというようなことが考えられました。そんなことから家族の変遷というか、家族、世帯の独立というようなこともたどれるかなというような感じを持ちました。

樋口：はい、ありがとうございます。これは非常に重要なことなんですね。昔はしっかりした住居址が発見されるというのは僕らは繩文中期くらいからじゃないかと思っていたのですが、この向陽台の住居は径が9mというから皆さん想像してください。どのくらい大きな住居址だか。相当な大きなものです。その後もこんな大きな住居址は早期ではありませんが、この向陽台はそういう点で炉が無かった住居址、周りに貯蔵穴が多いということで今小林さんが言ったような、その裏側に潜む社会生活まで分かってきたと言えます。ところが同じ早期でも終り頃になると、矢口遺跡の如く小林さんが言ったように炉がある住居址がたくさん出てきたりします。小林さん、矢口は環状集落になったんだよね。

小林：ええ。矢口遺跡では、住居が15軒発見されまして、住居が環状に建ち並ぶといいういわゆる環状集落の姿を示していました。最近よく環状集落の初源というんですか、最も古い姿を示しているということでこの矢口遺跡を取り上げる研究者も多くなってきています（資料-2）。

樋口：私達が考えていたよりも早くから縄文人達は環状集落を形成していた。環状集落が早期からあるんだということを我々が知ったことも、この松本平の発掘で非常に大きな成果だったんじゃないかと思われます。本当にもう少ししゃべりたいこともあるんですが、次の縄文前期に移りたいと思います。

樋口：縄文前期というのは、早期に続く時代ですが、一般的な学界の常識としては、この前期から本当の意味での縄文文化の発展期になると言われているわけです。この前期が発展期、次の中期が最盛期になるわけです。その発展期に入った前期の時代にですね、非常にいろんな面白いことがこの松本平でも発見されて、一つは、やはりなんと言ても県内で一番最初に前期として大きな発掘をした大町市の上原遺跡（図-1 ○1）です。ウエーハラと書いてワッパラと読みます。余分な話になりますが、私はこの上原へ行きまして、この遺跡を掘らせていただき、卒業論文を書きました。私にとって忘れられない遺跡、安曇野の遺跡でございますが、ここに写真がありますね。島田さん、上原遺跡についてちょっと簡単に話していただけませんか。

（前期遺跡の多い北安曇郡・大町市、そして玦状耳飾り）

島田：上原の配石遺構ですが、今は復元された石が立っています。（巻頭図版3）しかし見つかった時は石が倒れていたということで、まあ立っていただろうということで大場磐雄先生¹⁰が立てて復元したということです。それで、石は柱状節理をなしている安山岩を使用しています。この安山岩は、上原のすぐ横に流れています鹿島川で採取されました。本当に加工したかと思うほど柱状節理が発達してまして、しっかりとした自然の石柱になっており、それを利用しています。それが二つの円形に分かれあってただろうと言われてます。それでちょっと写真、これ白黒ですからいけませんが、手前に一つ石があります。それと右側のストーンサークルと結ぶと、だいたい連華岳という尖った常念岳みたいな形をした山の頂上にほんぱ繋がります。おそらく山を信仰したものだろうということが大場先生の時から言われております。それから、後でまた質問されるから先に言っときます。北安大町¹¹というところは大変に縄文前期の遺跡の多い所でございまして、普通は中期の遺跡のほうがが多いのが一般的なんですけども、大町市内だけで前期の遺跡が45ヶ所あります。しかし中期の遺跡は半分の25ヶ所です。なぜ大町で前期が栄えたのかということですが、まあ上原のような配石遺構ができたのもその結果でしょうが、おそらくは耳飾りの生産というのがメインになっているかと思います。大町では遺跡を一つ掘れば、耳飾りとか玉だけで10点、20点出土するというのがざらです。他の地域の遺跡は1個か2個あればいいというところなんです。この前期の耳飾り生産遺跡の多さということに繋がっているのかと思っております。

橋口：私が質問したいこともみんな答えてくれたようでございますが、大町市から北の白馬にかけて前期の遺跡が多いということは、これは長野県だけじゃなくて他県でもこんなところはないんじゃないでしょうか。島田さんはそれに対し今、玦状耳飾りの話をしましたが、玦状耳飾りというのをご存知ない人のためにここへ書いておきました。ここに穴が開いており、これを持って耳たぶへつけるわけですね。これはほとんど滑石製品です。滑石というと皆さん思い出すでしょうが、小学校時代にロウ石を使いましたね。それで作るわけです。島田君の所で掘った遺跡では日本でも最大じゃないかと言われている耳飾りが出土しましたね。あれ何cmありましたかね。

(大町市上原遺跡の環状列石－大場磐雄先生の思い出)

島田：7.5cm、7.8cmだったかな…

橋口：この耳飾りは7.8cmあったそうです。こんな大きなものをつけたんですね。それだけじゃなくて大町地方には例えば皆さん、ちひろ美術館⁽¹⁰⁾ご存知ですね。あの周り一帯は、ものすごい玦状耳飾りをつくった遺跡なんです。ちひろ美術館をつくる時は試掘だけで埋め戻してしまい本格的な発掘はできなかったようですが、本当はあそこも耳飾りの大生産地域だったらしいんです。有明山社遺跡(図-1 ○7)というなんですがね。

ちょっと横道に反れますか、早期の終わり頃からこの前期の初めにかけて、こんな耳飾りが、日本全国で一斉に出てくるんですが、今ではこれは中国から渡ってきたということが判ってきました。北陸の芦原温泉の近くの遺跡⁽¹¹⁾ではこれを付けた人たちのお墓がたくさん出てきました。それを一つ北安曇でこれからも少し追いかけていきたいなと話し合っています。じゃあ次にさっきの環状列石のお話をしましょう。上原の環状列石というのは小さいんですが、一番有名なのは皆さんがよくご存知の秋田県にある大湯の環状ストーンサークル⁽¹²⁾です。よく写真が出来ますね。あの環状列石と同じものが上原で出来ました。昭和28年か29年に出来たんですが、大場先生がこれらの石を立てまして、日本で最も古い環状列石だということで話題になる予定だったんです。しかし、これは中央の学者からほとんど取り上げてもらえませんでした。なぜかというと、これは石を自分で立てちゃったからですね。石がみんな倒れて出てきたんです。私もその場所を発掘してましたから。例えばここで申しあげますと、これ倒れていますね。この石をどっちの方向に立てるかということが問題ですね。こっちへ立てた場合と反対側に立てた場合だと立つ位置が違っちゃうわけです。ところが現地へ行ってみると分かりますが、実にうまく丸が二つあります。そのうちの約半分はこう立てた時に幾つか円になりそうだと考えたんですね。で、大場先生はこれはきっとあとで崩れたんだろうというわけでその辺にあったような長い石をその間に置いたりなんかして円く立てていったわけです。だからどちらかといふとちょっと問題あるわけですね。皆さんも思いますね。で、私は学生で若かったんですから、大場先生にそんなことはありえないというわけで大喧嘩したんです。そのため、私はその場で破門されて平出に帰らさせられました。だめだなあと思ってね。そしたらそれから數十年経った時に大場先生がそういうことをやっていてくれたことが非常に素晴らしいことだったと私自身が感ずるわけです。それはなぜかというと、中央道の阿久(あきゅう)遺跡⁽¹³⁾で同じように石が立ったんです。発掘で見つかった時は倒れてました。ところが倒れたらしい穴がありますからそれを立てていくと2列の石がですね、蓼科山へ向かってずらつと並んでいるということが判ったわけです。まあその時に私は自分の恩師である大場先生の慧眼をあらためて知ったわけでございますが、今島田君が言いましたね。蓮華岳に向かってこうちょうど中心線がある。今、日本の考古学ではこれが流行っていましてね、ランドスケープといいますね。もう現在全国で40ヶ所くらい冬至の日だと夏至の日だと必ずそのこういう環状列石の中心線を結



軽井沢1遺跡出土玦状耳飾



阿久遺跡石列

ぶところにびしっと落ちるというようなことが判ってきております。あの有名な三内丸山（さんないまるやま）遺跡には6本柱のすごい建物がありますね。あの建物の真ん中、縦の真ん中のところに、あれは冬至でしたか夏至にちゃんと太陽が落ちるんです。特に小林達雄先生がやっていますが、今島田さんがちょっと発言したので。私ももう一度上原は再検討する時じゃないかと思うんです。他県の遺跡は前期じゃなくほとんど中期・後期なんです。上原だけ前期なんです。ですからそういう点では是非これは島田さんをはじめ若い人たちにもう一度環状列石、日本で一番古い環状列石ですから、そのあり方を検討してもらいたいなと思うわけです。あまり長く話しているといけませんので、玦状耳飾りの話は出ましたからそのぐらいにしておきたいと思います。それでは、塩尻あたりに最近ちょっと面白い遺跡が出来ましたので、女夫山ノ神について小林さん、ちょっとお話をいただけませんか。

（前期末から中期初頭の斜面住居－女夫山ノ神遺跡）

小林：女夫山ノ神、片丘の北熊井で発見された遺跡（図-1 ○17）です。前期の最終末一部中期初頭にかかるかなという集落で、住居址の数が全部で25軒発見されました。住居の配列の仕方が特殊というか特異でして、二つの群に分かれますが、北の群が11軒、南の群が14軒で、ほぼ環状というか弧状に住居が配列しています。南の群にあたる住居が南斜面、傾斜地につくられています、一応堅穴住居ですけれども、傾斜地の下のほうの壁は全て流されてしまっているような住居でした。住居をつくるには非常に不安定な場所に何軒も家が建てられていたという状況です。あの台地の上の平らな部分は何かということになりますけれども、そこには1300基にものぼる小さな土坑と言う穴が本当に月の表面のクレーターのような形にたくさんあけてありました。どうも最近分かってきたことなんですねけれども、縄文時代前期の終わりから中期の始めにかけては



女夫山ノ神遺跡斜面住居発掘風景



女夫山ノ神遺跡第10号住宅址

斜面集落って言うんですか、斜面に家を建てるような特徴があるのではないかということがだんだん判ってきました。ちょうど時代の大きな変換点で言うんですか、前期から中期に移り変わる時にこういった特殊な村づくりがおこなわれたんじゃないかなというようなことをこの女夫山ノ神では感じました。

樋口：私も一緒に掘りましたが、私はこういう住居を「斜面住居」と名付けたんですが、皆さん解りますか？ 要するに住居を作る時、傾斜地ですから、一方を掘るだけで家が建つわけですね。簡単な家だったんじゃないかなと、またみんな小さいんですね。皆さんが知ってる堅穴住居は地下に大きく掘ってありますね。深さ50cmくらい。ところが山ノ神は半分はこういう斜面住居で、非常に特殊な住居です。なにもこれは山ノ神だけじゃないんです。今私はその資料を集めていますが、もう各地で同じ住居址の存在が確認できました。で、おもしろいことに、その後、縄文前期末の次になって、中期が始まり、縄文文化の発展期へと向っていくわけです。この中期の最初一中期初頭になると興味ある変化があらわれます。普通の住居は4、5mの直径の住居が多いんですが、この頃から10mぐらいの大型な住居が出てくるんです。

そしてこの時代になるとどうやら台地の上の平坦な場所に住居、集落を営んで環状集落のような大規模な、ムラが完成するらしいんです。これは東京・埼玉・神奈川県の遺跡を調べてみると、そういうことがはっきりと分かるわけです。どうも松本平でも同じような傾向をしているんじゃないかなと。最近のちょっと面白い話をしますと、この大型住居はどうも日本海側から入ったんじゃないかなという意見もあります。関東じゃなくて日本海側から信州には入ってきたんじゃないかなと。山梨にも最近出てきました。八王子あたりにも大きな住居があるわけですが、山ノ神では、小林さん、何mありましたかね。

小林：9.7m×7.7mで、ちょっと楕円形の住居です。

樋口：楕円形した相当な大きな住居址ですね。ようやく信州も面白い成果を学界に提供してくれたなあと思っているわけです。その他あの塩尻の剪屋敷（図-1 ○14）も面白いのですが、時間の関係で省略し、いよいよ

本論ですね、今日一番のいろいろ問題がある中期に入りたいと思います。

樋口：縄文中期というのは縄文文化の最高の時代です。この松本平でも、平出をはじめ遺跡がたくさんあります。私の作った分布図をみてください（資料-3）。いかがですか？ この松本平の山麓にいかに縄文中期の遺跡が多いってことがお解りだと思います。大町のほうに行くとだんだんと少なくなってゆきますがね。ですから縄文中期の松本平は諏訪、伊那地方に続く日本でも最も縄文文化が栄えた地域として全国的によく知られているわけです。それについてこれから関係の方に話してもらいたいと思います。さきほど島田さんは大町は前期の遺跡が多いと言われていましたが、大きい中期の遺跡はあまりないですね。どうですか？



平出遺跡全景

島田：それほどありません。例えばこれは後晩期にも関係してくるんですけども一津遺跡（図-1 ●1）はかなり大きい中期の遺跡ですし、前期から続いている大崎遺跡（図-1 ○3）も配石址を持つ大きな遺跡です。そういうやつは单発的にはありますけれども、たくさんはございません。

樋口：はい。やはりあの塙尻や松本に比べると、大町周辺はちょっと少ない。それじゃあもう少し南にきました徳高町あたりはいかがですか？ 山下さん。

山下：徳高の場合は、ほとんどが中期の遺跡になります。ただ離山（図-1 ●7）等は、後期、晩期もありますけれども、縄文時代の遺跡のほとんど八割がたは中期ということになりますね。

樋口：もう徳高までくると今言ったように中期の遺跡がすごく多くなるわけですね。その中であの他谷遺跡から出土した土器でおもしろい土器がありました。山下さんちょっとあれを紹介してくれませんか。

（他谷遺跡の広耳付壺形土器）

山下：他谷遺跡（図-1 ●9）なんですが、番号でいきますと、大きな地図の9番、それから今の縄文時代の中期の分布図ですと徳高という字が書いてあるところのすぐ左側の1番にあたります。満願寺というお寺があります、そこから、東に向かって川窪沢川が流れてくるわけなんですが、その北側にあります。部分的な発掘調査でしたので、全体を把握することはできなかったんですが、それでも45軒の中期の住居址が発見されました。そのうち5軒が敷石住居でした。敷石住居といつても、敷石住居ができる時期の中で、早い段階のものです。その敷石住居の1つから、壺の形をしました大きな耳のついた土器が出土しました。で、この住居址の特徴は、大きな耳のついた壺の他には、埋甕が入口部分にあっただけで、その他は、ほとんど土器が出土しなかったということです。ちょっと特異な住居になるかと思います。で、住居址には敷石の他に、石を敷いてないところには、他の場所で焼かれた焼土を持ち込んで、土間のようにたたいてありました。広耳付きの壺形土器は全国でもあまり例がないということです。



山下泰永氏



他谷遺跡出土広耳付壺形土器

樋口：この広耳付土器はすごいです。実際に見ると小さいものですがね、この辺では展示したことになかったかな、まだ。県立歴史館⁽¹⁵⁾や、この前朝日美術館での「唐草文土器の世界」の時にも展示⁽¹⁶⁾しましたが、これはもう傑作でございます。で、今焼けた家の話がありましたら、他にも他谷では非常に面白い構造がたくさんあつたんです。ちょっと面白い宗教的なこともありますて、ここで桐原先生あたりにしゃべっていただければと思いますが、時間がありませんので先に行

きます。穗高ではこの他に離山という、今ゴルフ場になってますね、あそこあたりなんかはもっとすごい中期の遺跡じゃないかと思うんですが、あれからずっと掘金、三郷へ来て遺跡がたくさんあるわけですが、そういうところはとばしまして、それでは梓川を渡ってこっちへ来た波田、山形あたりの状況をひとつ和田君しゃべっていただけませんか。

(西山山麓の大遺跡群－葦原、麻神、殿村、三夜塚、淀の内、熊久保)



和田和哉氏

和田：梓川を渡りまして山形、波田、朝日ですが、山形なんかは、遺跡の95%ぐらいが縄文時代中期の遺跡と言っても過言ではないぐらいで、波田も朝日も縄文中期の遺跡がすごくたくさんあるところです。波田町のほうから行きますと、梓川の河岸段丘の上、森口というところに葦原遺跡（図-1 ●20）があります。そこは段丘を上ったところで東西500mくらいにわたって、下島遺跡、葦原遺跡という遺跡が並んでいまして、かなり大きな集落があったことが分かっております。こちらのほうも昭和30年代の後半くらいから松商学園高校で発掘調査をしましてかなりたくさんの中物が出ています。

あと、同じ波田町の中では、このほか麻神遺跡（図-1 ●21）があるんですが、この遺跡も縄文時代中期中葉から末葉の大集落だということが分かっております。山形村に入りますと、殿村遺跡（図-1 ●24）が昭和60年前後に発掘調査をしたんですが、こちらもコンテナで200箱くらいの土器が出てきた大きな遺跡で、それと山形では三夜塚（図-1 ●22）という昔からすぐ有名な遺跡があります。ここはたくさん土器が出てくるので、周辺の方が盗掘にやっているわけです。復元した完形土器は骨董品としてどこかへ売り払ったという話です。そんなことで昔から有名な大遺跡があります。それと淀の内という遺跡（図-1 ●25）なんですが、こちらからはヒスイのペンダント、その表の右上にあります、こうしたペンダントが3点出てきたということで、大変駆けがれた遺跡であります（巻頭図版4）。朝日のほうは熊久保という遺跡（図-1 ●26）があるんですが、こちらは樋口先生が発掘調査をずっと昔から携わっていまして、先生のほうは詳しいかと思いますので、詳細は省略したいと思います。波田町・山形・朝日各村には大変縄文時代中期の遺跡が密集している場所ではないかというふうに思います。

樋口：地図を見てお分かりのように、波田から朝日、塩尻の一部のいわゆるアルプスの山麓ですね、ここがものすごく縄文中期の遺跡が密集してあるわけです。これは八ヶ岳山麓とやや似るんです。そういう遺跡のあり方は、全く反対側の鉢伏山麓にもあるわけです。ですから、今、朝日まできましたから塩尻からこの鉢伏山麓までを小林さんちょっと概観していただけませんか。

(西山山麓と東山山麓の遺跡規模の相違)

小林：塩尻それから松本にかけて、今樋口先生がおっしゃったように本当に縄文中期の遺跡の中では八ヶ岳山麓の遺跡の分布に匹敵するものがあるというように考えてます。ただ私の印象としては、東山の塩尻松本の山麓っていうのは、意外とその台地自体が狭いものがあって、それにひきかえて西山山麓のほうは台地自体が非常に幅が広いという特徴があるんじゃないかなと考えています。そういう地形上の制約から遺跡の規模という面で見ますと、どうも東山山麓のほうの遺跡の規模は西山山麓に比べてやや小ぶりかなという印象をうけています。で、西山山麓のほうの遺跡が全て大規模な遺跡かということではないんですけども、今和田さんがおっしゃったような遺跡に見ましてはかなりすごい規模の集落であるというように考えていまして、東山については大きな規模の集落はありますけれども少し小粒かなという印象を持っています。

樋口：たぶん現地の山麓に行ってみれば分かると思うんですが、山形のほうはすごいですね。あの波田なんか平らですね、ずっと。ところが鉢伏山麓へ行くとどうですか、こう山麓に傾斜がありまして、そんな大きな波田や山形のような平らなところがないんですね。ですから小林さんが今言ったようにどうも遺跡はこちらに比べると反対側は少ないんじゃないかなと、あとでこの問題、この違いがですね、なんかの面でも出てくるわけですが、松本のところを直井さん、最後に簡単に中期のあり方をどうぞ。

直井：はい。松本も、今小林さんが説明された鉢伏山麓の続きで、中山とか内田あたりに、中期の遺跡がやはり幾つもかたまっています。それからあと里のほうに降りて、里山辺あるいは旧本郷村⁽¹⁾あの辺りにも、かなり低いところに幾つか遺跡が見つかっております。ですので、松本までくくりますと、塙尻のほうから統いてくる山麓の遺跡の他に、低地に縄文時代の遺跡が広がるところが出てくると、そんなような特徴があるんじゃないかなと思います。

樋口：はい。なんか中期の遺跡というと山麓、山麓と僕達考えてしまうんですが、実はあの松本の神林から工業団地がありますね、アイシティがあるような、あそこへずっと道路で行きますと、一番低いところに川西開田遺跡（図-1

●19）があります。資料でいくと19番ですね。この上の図で見ますと、これは本当に田んぼの中でございます。その2mくらい下からなんと縄文中期の大きなムラの跡が出てちゃったんです。ここでは、先ほど話したような中期の大好きな10m近い住居址も出るというような具合で、どうも我々が山麓ばかりに集落があるのかと思うと大間違いで、実は僕らの知らないもっと低いところにもたくさん集落が眠っているかも知れないということを考えなければいけないと思いました。だから縄文中期の集落は山麓だけじゃないんだよということをここでちょっと断っておきます。では、中期にはいろんな問題がありますが、縄文

中期というとやはり集落＝ムラというものが非常な特殊・特有な形で形成されてくる。先ほど言いました環状集落ですが、その環状集落を、全面的にわたって掘った塙尻市の俎原という遺跡（図-1 ●31）がありますんで、これについて小林さんに大切な点だけを幾つか挙げて図を見ながら発言していただきたいと思います。

（塙尻市俎原遺跡の環状集落の時期的変遷と住居の特性によるグルーピング）

小林：はい。資料の図の1（資料-4）です。縄文時代中期の俎原は、分布図をちょっとご覧をいただきたいと思いますが、東山山麓の先ほど言いましたその舌状台地の上につくられた遺跡で、発掘調査ではひとつつのムラを完全に掘り出したかなというような遺跡です。住居跡が147軒、土坑という小さな竪穴が169基ありました。特にその住居の分布を見ますと、いわゆる環状集落といいまして、中央に広場をもってその広場を取り囲むようにドーナツ状に住居が建ち並んでいたという集落でした。ただですね、よく言われますけれども、縄文時代中期という時代は約千年間にわたって続いた時代です。ここの各住居から出た土器の分析によって最低でも13の段階（時期）にわたって集落が変遷したんだろうということが分かっていまして、各住居をそれぞれの時代時代に当てはめていきますと、その移り変わりというものが分かってきました。

小林：図にありますように一番古い時代、中期のはじめには、台地の両側に2軒だけ家がつくられていました、それが次第にだんだん住居の数が増えていきます。2段目の一番左側になりますともう環状集落、まあ馬蹄形といつてもいいかもしれません、ほぼ輪のように住居が建ち並んでいるような状態が認められるかと思います。で、2段目の2番目になります、それがややちょっと崩れます。で、ずっと3段目にいくに従いまして住居の数が減ってきます。ですが3段目の一番右からまた環状のような形にムラが整ってきます。4段目の一番左なんてのはもう本当に環状集落の典型的な姿を示していますし、左から2番目になりますとその集落がちょっと移動したような姿も見えてしまいます。縄文時代の中期の集落といいましても、住居の軒数については幾つかの波があったんだ、盛衰っていうんですか、栄えた時もあったし、衰えた時もあった。そういう波があったということがこの分析から分かりました。もうひとつ大事なことはですね、その4段階目の集落の流れの中の、左から2番目、曾利Ⅲ期⁽²⁾って小さい字で書いてありますが、この時代の住居の建ち並び方とそこから出した特にお祭りに使われる道具、土偶とか埋甕とか、釣手土器とかをどの住居から何が出たかという分析をしました結果、ある住居からは土偶し



直井雅尚氏



川西開田遺跡全景



俎原遺跡全景

か出ないし、ある住居からは埋壺しか出ないというような家々の特徴が分かってきました。それを住居の建ち並び具合でグルーピングしましてどのようなかたちで建ち並んでいたかということを分析してみましたら、そこに円でくくられていますけれども、どうもいくつかのグループに分けることができるということが分かってきました。ということはそれぞれのグループの中で信仰的な生活を共にする住居が存在したのではないかということがこの組原の集落の中では分かってきました。当時縄文時代中期には、こんなようなムラの成立ちって言うんですね、そんなような姿がわかったんではないかというように考えています。ここらへんが一番大事な成果だったと思います。

樋口：小林さん、そのところもう一度言いますと、同じようなムラをつくって小さな円形で囲んでいますが、例えばそこでは土偶を持つ家は土偶を持つ、埋壺のある家は埋壺のある家というふうにいくつかグルーピングできるわけですね。

小林：そういうことです。

樋口：そうするとその家々の人たちの関係はどの程度の関係なんでしょうかね？

小林：この図にありますように、だいたいひとつのグループでは、3,4軒がグループになってます。ただ、27軒この時代にあるんですが、その27軒すべてがこの時期にあったとは限っていませんで、炉石のある住居と炉石がすでに抜かれてしまった住居がありますので、まだここは細分できると思います。おそらく2,3軒単位の住居のまとまりが1グループになっていたと思います。で、隣りの家で土偶を持っていて、自分の家では土偶はないけれども埋壺を持っているというような形で異なったお祭りの道具を持った家がセットになっていて、ひとつの世帯って言うんですかね、そういうものを構成していたのではないかなというように考えました。

樋口：はい。どうですか皆さん、考古学でも発掘してこういうことまでずっと判ってくるわけですね。そこからいろいろなものを僕等は考えていかなければならぬんですけど、組原はそういう点で典型的な環状集落として分析していくんですね、こんな長い期間にわたってきたムラだったんだということを皆さん知っていたただきたいと思うんです。ですからどこの遺跡もみんなこういう形にして千年間くらい続いた家々が残されるわけです。ただその中で千年間も続いているながら、絶対にドーナツの真ん中にあたる共通の広場には家が作られていないっていうことですね。ということはみんなが祖先代々受け継がれてきたそういう意識があって、受け継がれているわけです。千年ですからね、非常に長い間真ん中には家が一軒もありません。(実は真ん中に平安時代の家が一軒だけ発見されました)

次にこの時代の問題になるヒスイを当時掘りました和田君どうですか。淀の内のヒスイの問題で話してもらえませんか。

(長野県内のヒスイ出土遺跡－淀の内遺跡と一津遺跡)

和田：淀の内遺跡（図-1 ●25）といいまして、山形の先ほど申しました遺跡ですが、資料の図の2の右上に写真を載せてあります（巻頭図版4）。合計3点出ております。左の一番大きいものが長さが8.8cmで真ん中に穴があいております。ここに縄を通じて、首飾りとして首からかけていたものだと推測しています。出てきた状況ですが、直径が1m、深さが80cmくらいの穴を掘っていましたら、上方からは土器等何も出てこなかったんですけど、底へ到達したら、このヒスイが出てきました。こうした穴から左の1点と、右の二段になっている2点が別々の穴から出てきたんです。さきほど話題になりました環状集落と色々な要素を組み合わせていきますと、どうも縄文時代の人のお墓の穴を掘ったんじゃないかという感じでありますと、穴の中の遺体はもう土に埋ってしまったんですけど、このヒスイだけが残っていたと考えられます。

ヒスイがとれるのはもちろん新潟県の糸魚川ですね、その近辺でしか日本では宝石にできるようなきれいなヒスイは出できませんので、そちらのほうに行きますとこのヒスイを専門に作っている遺跡がありまして、そこからはるばるこの山形村の淀の内遺跡まで持ち込まれてきたものだと推測できます。ちなみに全国に糸魚川のヒスイが、散らばっておりますので、そのうちの3つが山形村の淀の内から出たということじゃないかと思ひ

ます。

樋口：和田君、製作過程に出る剥片が出たという話はどうなんですか？

和田：確かに淀の内遺跡から出ています。原石や製作の過程で出る石のクズ、剥片が全部で合わせて17点出ております。縄文時代の中期の頃には、糸魚川近辺でヒスイを専門に加工している集落があり、それが全国に流通していったというのが考古学の通説なんですが、淀の内では加工もやっていたんじゃないかなということで、非常に特殊な遺跡だと考えることができると思います。大町にある一津遺跡と山形村の淀の内遺跡を除くと、全国的に見てもヒスイの剥片とか原石が出る遺跡はそれほど多くないんじゃないかなというように思われます。

樋口：今の和田君の話にありましたようにヒスイといえば糸魚川がすぐ出てくるわけですね。今までは縄文あるいは古墳時代までの製作跡が全部新潟県下にあったわけですが、実は長野県でヒスイを加工したんじゃないかなという遺跡が大町で出てくるわけです。そして和田さんが話された淀の内遺跡で剥片が出たのは、もしかしたら山形村でヒスイの玉を造ったのかもしれないと言うわけですが、その点ではっきりしているのは一津遺跡です。島田さん、時代はちょっと下がるかもしれません、ヒスイに関して一津の話をしてください（巻頭図版5）。

島田：一津遺跡（図1-●1）なんですけど、大町というところは先ほども話しましたとおり前期では滑石製の耳飾りを造っています。富山から糸魚川にかけても造ってあります。ですからその伝統がきっと残っていて、玉造り集団がずっと残っていたんだろうと思います。その中で一津という遺跡は日本海側から技術を導入したんでしょうか、中期後半から晩期の終りまで約三千年に渡ってヒスイの玉を造っていた遺跡だということが確実になっています。ただ中期の資料は少ないものですから、まだなんとも言えないんですけども、大珠ということになると糸魚川、富山の朝日町やその近辺が独占企業であったようとして、大町で造る玉というのはやっぱり伝統的に滑石の玉ということになるようです。後期になってヒスイの独占が北陸で無くなつたんでしょうか、大町で造られるようになります。現在の松本まで来る塩の道⁽¹⁰⁾沿いが、ヒスイの持ち運ばれたルートだということなんだろうと思います。それで原石と剥片の話ですが、原石だけ出る遺跡は県内にも何ヶ所かあります。たしか穗高の離山でもヒスイの原石が出ていると思います。ですから原石だけで流通している可能性もあります。やっぱりヒスイというのは緑色をした奇麗な石という認識があるんでしょうか。海で拾つたままの「海浜石」と呼ばれる奇麗な石がそのまま大町までも運ばれてきています。そういうことから、もしかしたら奇麗さから重要性が生まれて、それが流通したという可能性もあるんじゃないかなと思います。

樋口：ありがとうございました。このヒスイはまだまだ極めれば深い問題があるかと思います。塩尻の上木戸という遺跡でも、一つの土坑から小さなものでしたが、5つもヒスイの首飾りが出た例もあります。今のところ岡谷、茅野など諏訪方面にもたくさん出ます。山梨県にも通じています。今島田さんが言われたようにいわゆるヒスイの道というのがあったんじゃないかなと思うんですよね。それと共にさっき話した縄文の前期には滑石の道というものがあったんじゃないかなと。やはりそういう文化の交流があったんじゃないかな。当然反対に長野県から出していく道は何か。これは黒曜石の道でしょう。

それでは次に中期の最後として土偶問題に触れたいと思います。この中期の土偶について、松本平でもちょっと毛色が違うんじゃないかなという研究論文⁽¹¹⁾を最近発表しました平出博物館の小林さんにそのいい所だけ



淀の内遺跡出土ヒスイ原石・剥片



一津遺跡全貌

短くお話をください。

(中期土偶の小林康男氏の仮説)

小林：土偶なんすけれども、松本平の地高・明科から塩尻までのエリアで、中期の遺跡が567ヶ所ありました。その中で土偶が出たところがどのくらいあるかといいますと、116ヶ所の遺跡から出ていて、全部で中期土偶553点が出土しています。ただ、東山山麓と西山山麓ではその在り方に違いがありますと、東山山麓の方では351点の土偶が出ているのに対して、西山の方では197点ということで、やはり東山山麓のほうが土偶の出土量が多いようです。その出土の状態を見ますと、土偶が数10点というように非常にたくさん出る遺跡と、まあ10点以下ぐらいで、あまり多くは持っていない遺跡、それから全く土偶を持っていない遺跡という3つの種類の遺跡があることがだんだん判ってきました。そこで考えましたのは、土偶のお祭りというのを皆さんもご存知だと思いますが、土偶を作って、それを壊すことに意義があるというようなことを言われていますが、



平出遺跡出土土偶

非常にたくさんの土偶が出る遺跡、例えば塩尻では平出遺跡ですか剣ノ宮遺跡（図-1 ●16）が該当しますが、これらの遺跡は土偶の祭りの中心となった集落ではないかと思っています。ひとつの台地に幾つか遺跡がありますが、その土偶がたくさん出る遺跡にそれぞれ各村から人々が寄り集まってきて、そこで土偶の祭りを皆んなで行い、当然大集落においてはたくさんの土偶を捨ててきますけれども、大集落に次ぐようなムラでは壊した土偶を一部持ち帰ったんだと。そして、もうちょっと小さな1、2軒しかないようなムラにおいては、まあ土偶を持ち帰ることはできなかつたんだけれども、土偶の祭りには参加したんだということで、ひとつの台地なら台地の中での集落のあり方が土偶のあり方から少し判ってくるかなと考え始めています。ちょっと付け加えますと、最近縄文土器型式の年代幅っていうのが国立歴史民俗博物館（21）の研究者を中心として研究が進み、一型式が60年から100年というようだんだん決まってきます。で、それを単純に土偶の出土量で割ってみたんですけども、そうしますと、縄文中期の中葉の頃は10年に一個くらいの数になります。それが縄文中期後葉になりますと、5年に一個くらいの個数になります。どうも、土偶の祭り、祭りって言いますが日常的にそういうお祭りをやっていたのではなくて、何か事ある時に土偶を作りお祭りをしたのではないか、何か事があった時に大規模集落にその周辺の人たちが寄り集まって土偶を使った祭りを行っていたというような印象を最近もっています。

樋口：ちょっと難しかったような感じもするんですが、これは、小林さんの最新の考え方でありまして、隣りにいる桐原さんは首を横にしたり、うなずいたりして何か反論や意見があるかと思いますが、時間が無いもんですから、縄文の最後に移っていきたいと思います。縄文中期を最高の時代としますと、次の後・晚期というのは、もうこの松本平は長野県中どこでもそうですが、遺跡がガタンと減ってしまいます。非常に少なくなってしまいまして、それこそ縄文人はどこへ行ったかというような状況になってしまいますが、それでも、この松本平で何ヵ所かそういう縄文後・晚期でいい遺跡が残されています。ここでは代表して、松本市のエリ穴遺跡（図-1 ■4）について直井さんに簡単に説明していただきます。

（日本一の土製耳飾の出土量を誇るエリ穴遺跡）



エリ穴遺跡出土土版

直井：エリ穴遺跡ですが、これは昭和40年代に深志高校が発掘した後、平成7年に松本市教育委員会で発掘をして、後期から晩期にかけて遺物が大量に出土しました。中でも耳飾りが約2,600点出土しております（巻頭図版7）。どうも後期から晩期にかけて小規模なムラがありまして、その村の近くに遺物を大量に捨てているんですが、その中でも耳飾りがたくさん出ています。後期や晩期に、耳飾りがたくさん出る遺跡とそうじゃない遺跡とがありますと、エリ穴はそういう点ではとてもたくさん出る遺跡、やはり先ほどの小林さんが話された土偶のネットワークみたいなものと同じように、耳飾りについても集まってこの耳飾りをつけたり外したりするような、とにかくお祭りみたいなものがあってそういうことの中心になったムラだったんじゃないかと思われるような出土をした遺跡でござい

ました。エリ穴遺跡は内田の馬場家住宅⁽²⁹⁾のすぐ下のところにある遺跡でございます（巻頭図版6）。

樋口：エリ穴は、これはすごい遺跡でございます。何しろ耳飾りの2,600個っていうのは日本で第一位です（巻頭図版7）。全部完全なものではありませんが、破片を含めて2,600個です。その次の栃木県の藤岡神社⁽³⁰⁾あたりで1300個ぐらいですから、圧倒的にエリ穴は耳飾りがたくさん出た遺跡ということができるわけです。今度リニューアルしまして、考古博物館に奇麗に飾ってありますんで、行って見てください。これは先ほど話しました縄文前期の玦状耳飾りとは違って耳たぶの中に全部入れちゃうわけですね。そういう耳飾りです。ですから耳たぶがこう伸びるわけですね。一番大きいのは径が10cmくらいのや、7.8cmのがあるんです。すごく重いんですよ。これね、両方入れたら大変だろうと思うんですが、実はこれには、今直井さんが何か土偶と同じようなお祭りに関係するのではと言うんですが、最近長野県考古学会誌にこの耳飾りを研究した吉田泰幸さんが発表⁽³¹⁾していますが、やはり耳飾りをつけるっていうのはこの大きさが相当問題があるらしいんです。吉田君は人生の通過儀礼のなかに二度ほど画期がある。

耳飾りの大きさを計測していくと、二つ山があるというんです。成人式の時とそれからもう一つは結婚式の時ですね、その時に使ったんじゃないかというような説もあるんですが。エリ穴は、今松本市で報告書を作成中でございまして、いい報告書を僕らは期待しているんですが、今耳飾りの研究もそういう色々な問題が出てきています。縄文晩期といいう一番最後の時期の非常に面白い遺跡だったんですが、あと縄文晩期では市内清水にある桜橋のすぐ上に、女鳥羽川遺跡（図1 □3）というのがあります。女鳥羽川の川底から出てきた大きな土偶、あれは長野県で一番大きい土偶じゃないかな。

樋口：今度茅野市で発見された仮面土偶⁽³²⁾のほうが大きいかな。なお、女鳥羽川から出土した土器の内側についた、いわゆる「おこげ」ですね、そのおこげを削って、先ほど話した日本で今進んでいるC14の検査をやっております。あれは直井君、出ましたか、検査の結果は。

直井：一部結果が出て送ってもらったんですけど、ちょっと点検してないです。⁽³³⁾

樋口：そうですか。現在あの「おこげ」で年代測定が全てできるんです。縄文晩期というのはどちらにしまあこの他、石行だと僕ら考古学の専門家でいえば非常に面白いものもあるわけですが、時間もあまりないので、ここら辺りで縄文時代をひとつ終わりにしたいと思います。なんか縄文時代を通じてこれは問題だという点、まず桐原さんからひとつなんか一言でも二言でもいいんでなんかあつたら言っていただけませんか。

桐原：縄文晩期のところと弥生のところでどうしても聞いておきたいことがあるんです。最近皆さんご承知のとおりだと思いますが、弥生のはじまりが500年遡ってしまった、で、これは九州のことだろうと、信州は関係ないだろうと思っておりましたところ、どうも信州においても弥生のはじまりが500年遡るかもしれない。で、それを証明するというか裏付ける遺跡はどこなんだといいますと、それがこの一番最後に書いてあります縄文晩期の石行（図1 □1）で、これについてちょっと直井さんに教えていただければと思います。あそこから出た石剣（せっけん）のことです。

（弥生の始期－石行遺跡の問題）

直井：確かに石行遺跡では、縄文時代の晩期のしかも一番最後ぐらいに位置するのではないかといわれていた土器が大量に出まして、その中に混じてこちらではない、九州とか西日本で出土する石剣の先端部が出てきたということで注目されているわけです。この石行遺跡の時代は、縄文時代のはうから研究してくると、縄文土器の一番最後の時代になるわけですが、その石行遺跡の土器の中に例えば東海地方、名古屋のほうの弥生時代の一一番古いような土器が、少しほんぽつんと混じってきているのではないかと、もう一回その石行遺跡の土器を



女鳥羽川遺跡出土土偶



全部ひっくりかえしてそういうことを調べたほうがいいのではないかと考えられているわけなので、今桐原先生がおっしゃられたように一番の接点になる時期だと思います。

直井：弥生時代が500年遅いということはその弥生時代だけ前期だけ500年長くするってわけにはいかないもんですから、当然その分縄文時代を短くするというのか、上に引き上げなきゃいけないことだと思います。例えば石行遺跡とかその頃の時代の土器だけ見ていると、長野県の縄文時代の土器の続きの時代の土器であるけれど、西日本で見てみれば実はもう弥生時代の前期にはいっていると、そういう時代のものだというふうに考えていかなければいけないと思って、もう一回、石行遺跡の土器を再点検しなければいけないと考えております。

樋口：非常にこれは難しい問題で、例の500年説ってのは皆さんご存知ですね、弥生時代が500年古くなったという。わずか500年じゃないかっていうんですが、これ非常に大きな問題点を含んでおりまして、石行遺跡というのは寿の赤木山にある遺跡です。非常に面白い遺跡だったんですが、そこの資料なんかを今後再検討することによって今桐原さんから出されたような問題もある程度解決に向っていくんじゃないかということです。どうでしょうか、他の人は縄文時代でこういう点をあと注意すべきだっていうものがありましたらどうぞ遠慮なく発言してください。

それでは時間も参りましたので、まだしゃべり足らないことがたくさんあるわけですが、縄文時代は以上で終わりにしたいと思います。なかに質問事項がありましたら、どうぞ最後のところでまたお聞きください。私の司会があんまり上手くなくて、皆さんが聞きたいことがあまり聞けなかった点があったとしたらお許し願いたいと思います。それではここで休憩をしたいと思います。あとは司会のほうへお任せします。

司会：では前半の部分を終了ということで10分ほど休憩をとりまして、3時10分ぐらいから再開したいと思います。

(休憩)

司会：では時間になりましたので後半を始めさせていただきます。桐原先生よろしくお願ひいたします。

5 「弥生時代」



桐原健氏

桐原：では弥生時代、史料の有無で分けると原史時代、そこから入ります、原史・古代。樋口先生と同じように私も研究史から入ってみたいと思います。文化財保護法ができる昭和25年から、平成の14年まで一体長野県でどのくらいの発掘がなされていたのか。結構握っているんです。6957件という発掘件数があります。その中で松本平の発掘件数はどのくらいかと言うと、786件。年次でわけていきますと、昭和49年くらいまで一年の発掘件数が一桁です。昭和の終りになってから急に増えました。昭和56年から二桁、それもはじめのうちは十件何件というのですが、昭和59年に23件、60年に48件と後半になって増えてきております。というわけで松本平では786件が今まで発掘されています。さて、日本近代考古学は明治10年のモースの大森貝塚の発掘から始まります。

今まででだいたい120年、そのうち弥生・古墳・古代の分野の研究は昭和20年の敗戦まではほとんど行われていなかったというのが実情です。古墳なんか前から掘っているんじゃないかと思われがちですけれども戦前は内務省の力がとても強い、それから皇国史観⁽³⁾がありまして、国内で古墳を掘ることはまず無理がありました。ですから古墳を研究している学者は朝鮮半島の楽浪や遼東半島へ行って発掘をしている。国内で古墳の発掘はほとんどされておりません。それは信州でも同じです。ただし、盗掘は盛んに行われておりまして、松本平の古墳のほとんどは処女状態を保ってはいません。そんなわけで本当に松本平の原史時代の考古学研究がはじまったのは戦後です。戦後50年、半世紀です。その半世紀の間、弥生・古墳・古代の研究は、縄文のように知識の蓄積がない全くのゼロからの出発、手探りで無我夢中で半世紀を過ごして参りました。やっと今息を

ついている状況、これから今までの資料を整理してなんとかしていこうという段階に今来ている。まあ今日のこのようなシンポジウムもその表れのひとつではないかと思っております。そんなことを最初に申しておきたいと思います。

さて弥生時代です。先に申しましたように500年遡ってしまいます、弥生時代は今までの600年間から1000年を越す期間に増えてしまうことは確かです。さて、その弥生が、この半世紀の間どのような調査がなされたか、それは本日いただいた資料、遺跡の一覧表と各時代の遺跡分布図を拝見すれば一目瞭然です。遺跡の発掘はそこに挙がっている状態です。この資料はとても大事です。殊に、弥生遺跡の分布図（図-2）は我々が郷土の弥生文化を考える上で貴重な資料になります。個々の件につきまして、基礎になるのは土器であります。縄文時代の土器は壺、深鉢が、唯一の器形がありましたけれども、弥生になると機能に応じて壺と甕と高杯という三つの器形が前期、中期、後期と時代によって変化をしてきています。我々はそれを時代のメルクマール⁽²⁾にしているわけです。その最初の発掘が百瀬遺跡（図-2 ●13・20）の第一次調査で、昭和26年に藤沢宗平先生が掘られました。今から考えてみるとこの百瀬遺跡は住居址の中から出てきた、まとまった資料ではありますけれども、この住居址が廃絶した後に投げ込まれた土器のような気がしております（巻頭図版8）。現在は地名表に載っている幾つかの集落遺跡で住居址ごとにまとまった資料が増えてきておりますので、弥生土器の研究はこれから盛んになっていくことと思います。

弥生時代の生活、生業、それを見るための資料が利器です。生産用具が生活を考える上での大事な資料になる。ところで松本平で利器である金属器の出土例は極めて少ない。金属器によって作られた木製品の出土も難しいかと思われます。となりますと、弥生時代の生活、生産、それを復元する材料は石器だけということになる。結論を言いますと、弥生時代の初めの頃は石器が使われている。そして後期になると石器がなくなってしまう。それは金属器に替わったからだといわれています。ですが金属器は鉄でありますけれども、これはほとんど見つかっていない。

今まで長野県の中で弥生の石器というと岡谷の庄ノ畠⁽³⁾や北信の栗林遺跡⁽⁴⁾、松本平においては城山遺跡の石器が有名でしたが、城山の石器は四散してしまって今は数少なく、それから城山はほとんど住宅地になってしまっている。でそれに代わるものとして境窪遺跡（図-2 ●19・22）、それからこの付近一帯のあがたの森。ここから出土した石器は正式な調査を受けての出土でありますので極めて貴重です。ということで、これは松本市の直井さんにお話をお願ひいたします。

直井：弥生時代の石器の中でも、伐採用の斧、加工用の斧が、境窪遺跡では見つかっています。磨製の石斧です。県町遺跡（図-2 ●16）でも同じく伐採用の太い大きな斧、磨製石斧、それから加工用の今で言う手斧や鉋の代わりになる扁平の石斧が見つかっています。境窪は中期前半の遺跡で、県町は中期後半から後期ですが、その中でも中期後半の部分に、そういう磨製の石器が幾つも見つかっております。そのほかに石器として、注目するのは境窪や県町で石製の矢じりが幾つも出ていることです。これは石を磨いてつくった磨製の矢じりと、打ち欠いてつくった打製の矢じりの二通りでございます。弥生時代の後期になると伐採用の斧や加工用の斧、要するに木材を加工する石器というのは使われなくなるんですが、なぜか後期にはいってもしばらくの間石製の矢じり、特に磨いてつくった矢じりが若干残っており、そんな特殊な状況が窺えるわけであります。

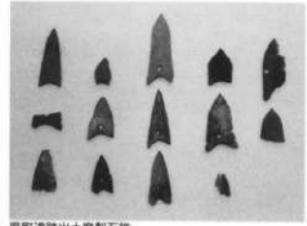
いずれにせよ、弥生時代の境窪や県町のような中期の遺跡を掘りますと、見事な伐採用の斧と加工用の斧や収穫具と言われています石包丁も見つかります。だいたいそんなところが境窪や県町の石器の状況でございます。

桐原：亡くなられた佐原真⁽⁵⁾さんが、弥生時代は戦争の時代だったと盛んに強調しておられました。それを松本平で裏付けることになると磨製の石鎌が挙がってくるわけですが、あれは戦闘用でいいんですか？

直井：確かに打製の石鎌より大きくて重そうなものが多いのですが、おそらく戦闘に直接使ったかどうかは別として、戦闘用のものを



百瀬遺跡出土土器



県町遺跡出土磨製石頭

頭に描いて作られた石器ではないかと思います。

桐原：弥生時代で松本平で注意しなければならないのはこの時代のお葬式の資料です。前半と後半とではだいぶ様相が違っております。弥生の前半では再葬墓が一般的がありました。死体処理を二回するお葬式。現在のお葬式は再葬ですね。火葬にしてそしてあらためてそれを土葬にしている。これが弥生の前半です。後半になると、今度は方形周溝墓、土坑の周りに溝をめぐらしたお墓が出現してくる。前半の資料としては針塚（図2-●15）もありますけれども、有名なものは明科のほうろく屋敷（図2-●7）だろうと思います。再葬墓について、大澤さんお願ひ致します。

（明科町ほうろく屋敷遺跡の再葬墓）



大澤哲氏

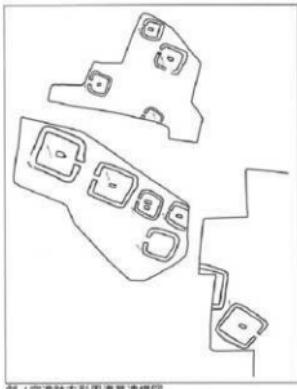
大澤：それでは明科町のほうろく屋敷遺跡の再葬墓についてお話をさせて頂きます。この図の7番がほうろく屋敷遺跡です。場所は19号線をずっと長野のほうに向かって行きまして、生坂村へ入るすぐ手前のところです。犀川の河岸段丘上につくられた遺跡でして、そこから再葬墓が確実なところで16基出てきました。大きくは4つのグループに分けておりますが、一応数としては16基ありました。先ほど再葬墓の説明が、桐原先生からありましたが、一旦埋葬して、骨になったところでもう一度その骨を取り出して、これを土器に詰めてもう一度お墓に埋葬するという施設です。ほうろく屋敷遺跡から見つかった例は、骨を納めた土器を穴を掘って埋めるわけですが、その埋めた後に、石を使って現代の墓石のように上部の遺構を作っているのが特徴です。それは、ちょうど握り拳大くらいの石をほぼ円形、あるいは楕円形に並べて、その真ん中に小さな小砂利みたいな石を置いて、明らかに上に埋葬したっていう目印をつくるのが特徴です。再葬墓の中から出てきた土器も、非常にいろんな種類があり、中には東北地方から来ただろうと思われるような土器、明らかに東海地方の影響を受けた土器もあります。もちろん地元で作られた土器もあり、非常にバラエティに富んでいます。場所が犀川のほんの近くですから、犀川を通じて流通の経路となり、いろんな地域との交易、交流があったということが判って非常に面白いと思いました。ただ、ほうろく屋敷遺跡の大きな特徴は、お墓は出ましたが、住んだ形跡は全くありませんでした。遺跡の中の約2万平米くらいの面積なんですが、そのうちの3分の2以上掘りましたが残念ながら生活の痕跡が出てきませんでした。だから生活とはちょっと別の場所にわざわざお墓を造っていたということが言えるだろうと思います。



ほうろく屋敷遺跡再葬墓上部配石遺構

桐原：弥生後期のほうで方形周溝墓、典型的な例が塙尻の剣ノ宮（図2-●30）で出ておりますので小林さんお願ひします。

（塙尻市剣ノ宮遺跡の方形周溝墓）



剣ノ宮遺跡方形周溝墓遺構図

小林：剣ノ宮遺跡というのはJRみどり湖駅のすぐ西側にあたる遺跡です。資料図の2に剣ノ宮遺跡の方形周溝墓の概略図が載せられています（左図を参照）。ご覧いただいて判りますように、非常に規則正しくお墓が造られています。方形周溝墓とは先ほどお話がありましたように溝で四角く取り囲んだ中に遺骸を埋葬する主体部というものを造るお墓であります、その溝の一角に陸橋があり、そこで人の出入りができるような形になっています。そこで一番大きなのが左端に溝が見えますが、これがだいたい一辺が20m四方ほどもある非常に大きなお墓でした。先ほど、大澤さんのお話では、ほうろく屋敷の方では集落の跡が見つかなかったようですが、この剣ノ宮遺跡では、すぐ西

側に田川端という弥生時代後期の大集落（図2 ●26）があり、おそらくこの剣ノ宮の遺跡と田川端遺跡が一体となつた地域であったんだろうと考えています。特にここで特徴的だったのは、お墓の遺骸を埋葬した部分から鉄をコイル状に巻いた鉄鎖、腕輪ですけれども、それが出土したということと、ガラス玉の装身具が226点も出たことです。松本平で方形周溝墓は何ヶ所か見つかっていますが、副葬品が出土したのはこの剣ノ宮遺跡と、塙尻市の丘中学校遺跡（図2 ●24）

の方形周溝墓だけです。剣ノ宮では発掘された範囲の中で方形周溝墓が11基見つかり、しかも非常に規則正しく並ぶところを見ると、どうも弥生時代の後半の頃になるとこういったお墓を造る特定の家系が続く首長の出現もここから読み取れるのではないかかなというように考えています。なお、鉄鎖というのは千曲川水系にたくさん出土例があるという報告がありますので、そちらのほうの影響もあるとも考えられます。

桐原：どうもありがとうございました。ただいまの方形周溝墓、それから前半の再葬墓、なぜそういうお葬式が行われたかということは、これは皆さんで考えていただければと思います。まだまだ結論は出ておりません。今、弥生時代の集落の話が出来たけれども、それについてはこの弥生時代の分布図で確認をしていただいて各人でお考えいただければあります。あと弥生時代といえば、塙尻の柴宮（図2 ●23）の銅鐸に触れなければならぬわけですが、銅鐸についてはまだ百家争鳴、結論は出ておりません。完全な形で日本の一番東の端っこから出たんだ。ひとつ皆さんこれから時間をたっぷりかけてお考えいただければと思います。ということで弥生時代は終わらせて頂きます。

6 「古墳時代」

桐原：次の古墳時代に入ります。まず古墳から申します。時代は3世紀から8世紀のはじめにかかる頃が古墳時代です。最初に申しましたように、皇国史観がありましたので、古墳の研究は昭和20年まではできませんでした。そういうことをまずお含みいただきたいと思います。で、松本平にはどのくらいの古墳があるんだろうかという数字だけまず申しておきたいと思います。日本全国で作られた古墳は15万基と言われております。その中の3707基が長野県の古墳です。その中で松本平はどのくらいか、郡でいうと安曇郡と筑摩郡⁽³⁾だけあります。麻績のほうは抜いております。松本平では345基です。ところで、それらの古墳の大部分は昭和20年までにはほとんどが盗掘されております。内務省は正式な学術発掘を抑えておりますのに盗掘のほうは盛んでありました。殊に信州人には神を恐れぬ県民性がありますので、用水堰にかける橋にするんだなんて言いまして、どんどん古墳を掘っております。ほとんどがやられてしまっている。その残された古墳、壊された古墳を掃除するということとでこの50年間にどのくらいの古墳が調査されたのか、70基掘っています。

その中には素晴らしい古墳もいくつかあるわけです。例えば東日本の歴史を覆した弘法山古墳（図3 ▲24）でありまして、で、弘法山古墳の話をしなければならないわけですが、この次の講座で青木さんと山下さんが2回に分けてしゃべることになっておりますので割愛をいたします。⁽³⁾。（図頭図版8・9・10）

それ以外の古墳はどうかと言いますと、中期の古墳もいくつかあります。ほとんどが後期古墳で、中期古墳は5世紀の古墳、後期古墳は6世紀、7世紀の古墳を言います。ほとんどが円墳です。現在、松本平には前方後円墳はないということになっていますが、桜ヶ丘古墳（図3 ▲21）がもししかしたら前方後円墳になる可能性があります（資料5）。あとは全部円墳ないしは方墳です。浅間温泉に続く東山温泉のところ、あれが天冠の出た桜ヶ丘古墳です。



剣ノ宮遺跡出土鉄鏡



塙尻市柴宮出土銅鐸



桜ヶ丘古墳出土天冠

積石塚古墳では針塚古墳（図3-▲28）、丸山古墳⁽³⁾、それから8世紀にかかるかもしれないという新しい安塚古墳群（図3-▲25）や秋葉原古墳群⁽⁴⁾は、よその地域には見られないような古墳であることだけを強調しておきたいと思います。安曇には有名な有明古墳群⁽⁵⁾があります。安曇の中のあそこにだけ古墳群が存在している、しかも金ピカものがたくさん出ている。これも古墳の分布図で見ていただければと思います。なんであそこにだけあんな古墳群が作られたのか考えていただければよろしいかと思います。上原古墳（図3-▲12）を山下さんに報告してもらいたいですが、時間がないのでとばします。

今度は古墳の背景となる集落に入ります。松本平の中で今まで古墳時代のムラとして知られていたのは、南の端にある平出遺跡（図3-●17）だけしか挙がっておりません。これは本当におかしなことで、松本平には少ない少ないといつても300いくつかの古墳があるわけです。その古墳の大部分は現在の松本市域の中に存在していて、塩尻には古墳は少ないんです。それなのに、代表的な集落というと平出遺跡だけが有名です。で、その平出遺跡の話をしなければなりませんが、時間がないのでとばします。

それ以外の集落遺跡ですが、一番ありそうなところは松本市域です。松本市の中に平出遺跡に倍するような集落がなければおかしい。そういう目で見ますと、それを思わせる兆しがある。松本市の高宮遺跡（図3-●16）はお祀りをした後の遺跡で、お祀りの土器がたくさんまとまって出土しています。同じような遺跡を長野県の中で探してみると、駒沢遺跡⁽⁶⁾、大ロフ遺跡⁽⁷⁾、中子塚塚遺跡⁽⁸⁾、最近では坂城町の青木下遺跡⁽⁹⁾、そういう遺跡と比べてみますと、集落と水田の境で大規模なお祀りをしています。ということは、高宮祭祀遺跡に接して大規模な集落遺跡がなければならない。おそらくあるはずだと思っております。そういうことで高宮遺跡、そして併せて出川南遺跡（図3-●15）、それと平田里古墳（図3-▲29）の両方について直井さんをお願いします。

（高宮の祭祀遺跡と平田里古墳）

直井：はい、今の国道19号線のすぐ横ですが、松本日産の建物の裏のところで高宮の祭祀遺跡が見つかっています。土器や遺物を大量に集めたものが15ヵ所ほどあって、特にその中で1号というものは約400点の土器を半径4.5mの範囲内にぎっしりと並べて、さらに土器の間には、鉄製の鏃とか鎌とか小刀とともに100点余りが入っておりまして、あと、ビーズ玉のような薄い小さい玉が5300点ほど入っておりました。ですので、先ほど桐原先生が言われたとおり、お祀りの跡だと考えられます。ちょうど場所も、そこから西のほうへ行くと高宮から征矢野のほうに向かって水がとても湧くところとして、また東のほうは若干小高くなっているところです。そのあと祭祀遺跡の東側を二度ほど発掘⁽¹⁰⁾する機会がありましたが、やはりこの時代西暦5世紀の住居跡がいくつか見つかっております。次に、その高宮遺跡の跡を継ぐ遺跡としては、高宮からずっと南東の今の南松本の一丁目、二丁目、芳野町、双葉町あたりにかけて大きな古墳時代のムラがどうもあるようでした⁽¹¹⁾、特に今の芳野町のジャスコ南松本店を建設する時に、堅穴住居跡だけで116軒という非常にたくさん住居跡が出てまいりました。この数字は平出遺跡にも匹敵するんじゃないかと思われます。また発掘したところの一角には、削られてなくなっている古墳の跡が出てきました。平田里古墳と名付けましたが、直径が24~25mはある非常に大きな古墳で、そこからは大量の埴輪が出土いたしました⁽¹²⁾。それまで松本平では、埴輪が並べられている古墳はなかった、あるいは見つかっていないかったんですが、平田里古墳には推定されるだけでも140本くらいの埴輪が並べられていたのではないかと考えられています。先ほど先生がおしゃられていたとおり松本市の中心部に実は古墳時代の大きなムラがあったり、あるいはその水田との間にお祀りをやった跡があつたりと、あるいは山際ではない平地にも大きな古墳があったことが判ってきたわけです。



平田里古墳出土埴輪

角には、削られてなくなっている古墳の跡が出てきました。平田里古墳と名付けましたが、直径が24~25mはある非常に大きな古墳で、そこからは大量の埴輪が出土いたしました⁽¹²⁾。それまで松本平では、埴輪が並べられている古墳はなかった、あるいは見つかっていないかったんですが、平田里古墳には推定されるだけでも140本くらいの埴輪が並べられていたのではないかと考えられています。先ほど先生がおしゃられていたとおり松本市の中心部に実は古墳時代の大きなムラがあったり、あるいはその水田との間にお祀りをやった跡があつたりと、あるいは山際ではない平地にも大きな古墳があったことが判ってきたわけです。

桐原：どうもありがとうございました。古墳と集落との関係を物語る良い遺跡が明科にあり、大澤さんに報告

してもらいたいんですが、やはりちょっと時間がむずかしいのでこれも省略をいたします⁽⁴⁾。

7 「奈良・平安時代」

桐原：時代をとばしまして、平安時代に入ります。分布図をみていただければと思います。奈良・平安時代の文化はどうしても西高東低で、西日本が中心になります。じゃあ東日本はどうなのか、松本平はどうなのかということになるんですが、西高東低は上層部の文化だけの話でありまして、古代の農民の生活・文化を考えることは逆で、今度は、東高西低で東日本が中心になります。殊に、これは我田引水ではなく、長野県、特に松本平は、古代の農村の復元、農村の研究をする上においてはピカイチです。そのことをまず最初に認識していただきたいと思います。理由は簡単であります、奈良・平安時代の西日本の農民はすでに掘立柱建物に住んでいます。ところで掘立柱建物は遣物はほとんど見つかっておりません。東日本においては古代に掘立柱建物も造られてはおりますが、それと同数、あるいはそれ以上に竪穴住居が依然として造られています。竪穴住居の中からは当時の彼らの生活遺物が一括して出土しているということです。古代の農民の生活を考える上で、東日本抜き、松本平抜きにして研究はできないというのが現実です。遺跡の数もとても多い。分布図をご覧になっていただければわかります。たくさんの遺跡が発掘され、立派な報告書が出されています。ひとつ分布図を見て研究していただければと思います。一般的農村のほかに、焼き物をつくった大規模な工房、それが松本平に一つあります。これについては山田さんにお願いいたします。

(焼き物の大生産地－北部古窯跡群)

山田：はい、生産遺跡という話がでましたが、須恵器という焼き物を焼いた窯跡のことになります。この須恵器という焼き物は、今までの縄文土器、弥生土器、それから古墳時代には土師器という焼き物があるんですけども、そういう焼き物と違いまして、青みがかった灰色で硬い焼き物です。これを焼くにはどうすればいいかといいますと、1100度以上の高温で、しかも還元状態、すなわち空気が遮断された状態で900度くらいまで温度を下げないと焼けないとされています。それを焼くための施設が窯です。この窯、いくつか条件がありますて、今までの集落遺跡だと古墳とは違った立地で見つかっています。まずこの窯ができるには焼き物を作るいい粘土がないといけません。その粘土の取れる近くに窯が築かれます。それから窯というのはトンネルを斜めに削めに削したような形になるんですけども、ちょうどいい斜面ですね、それがないとできません。それから大量の燃料となる薪、それからそういう特殊な焼き物を焼く技術、そういうものが全部揃って初めて窯というものが造られるわけです。もちろん広い土地を使いますし、技術も伴います。その背後にはおそらく権力者がいて、この窯焚きをしていたということになるかと思います。で、松本平の窯跡でそれとも、だいたい7世紀の中ごろに大村の妙義山の所に新切窯跡ということができます。その後、8世紀の後半くらいにかけて、塙尻市の菖蒲沢（図4 ●42）、それから松本市の中山丘陵、さらに岡田から農科町、四賀村にかけて窯跡がいっぱい造られます。8世紀の終りから9世紀代にかけては、この岡田から農科町、四賀村にかけて大規模な土器作りが行われることになります。しかも須恵器だけじゃなくて、土師器、それから瓦なども焼かれて、この時代の集落で使う焼き物全てを生産するような体制になっていきます。特に注意したいのが、農科では上ノ山窯跡群（図4 ●18）、菖蒲平窯跡群（図4 ●19）という窯を、たくさん掘っているわけですから、瓦だとか硯、留字で墨を入れる硯ですね、そういう普通の集落では使われないものもたくさん焼かれています。それらがどこに運ばれていったかというのが、これから面白い課題になるかと思います（資料-6）。



山田真一氏



上ノ山窯跡群14地区全景

桐原：どうも。というようなわけで生産遺跡としては山田窯跡群⁽⁴⁾が有名である。これは長野県の中で最大

と言っていいですか、山田さん。

山田：はい。最大と言つていいかと思います。

桐原：そういう工房の跡が松本平に存在している。おそらく供給先はこれは国府と考えていいかしら。

山田：はい。難しいところを振ってもらいましたけれども、実はこの時代、松本平で数千軒も集落を握っているんですけれども、そこからは出てきていないような土器もいくつか焼いています。おそらく国府で、また国府に近いそういう役所みたいなところで使われた焼き物だというふうに私は考えています。今後、松本平でそれが見つかった遺跡というのは、国府に近い施設と考えていいんじゃないかなと私は期待しています。

桐原：あと特殊な遺跡としては、お寺の跡がございます。長野県はお寺の跡の少ないところで、長野の小林計一郎さん⁽⁴⁷⁾は信州は無仏の国であるなんてことを言っております。その中で、長野県で一番古いお寺が松本平に存在をしています。明科廃寺（図4 ●8）です。大澤さん、簡単に報告をして下さい。

（明科廃寺）

大澤：明科廃寺でございますけれども、場所は奈良・平安時代の地図の8番で、場所はJR明科駅のすぐ近くでございます。ご承知のように駅前周辺で、現在は住宅が建ち並んでいるので、ごく一部しか調査しておりません。金堂や塔といったお寺の核心部分は、残念ながら調査をしてありませんで、どちらかというと、そういう中心的な伽藍から外れたような倉庫とか蔵が建っているような場所を調査しておりますが、そういったものも、瓦葺の建物でございました。

大澤：明科廃寺の造られた時代は、だいたい7世紀の後半ですね。西暦で言いますと650年以降ということになりますかと思います。その頃に造られ始めまして、途中で何回か建て替えとかをしているようですけれども、だいたい平安時代の初めくらいには潰れてしまうということです。その当時のお寺は有力者が造るわけですからとも、その人の住宅のすぐ近くに造ったようです。もうひとつは、今でも法隆寺だと奈良に大きなお寺がございますけれども、ああいう非常に目に見て大きなものを造ったというのが全国的な傾向だというふうに言われております。ですから明科のあの地に、いわゆる七堂伽藍を巡らしたような、しかも当時のことですから朱塗りの建物というものが燃然と輝いているということが一体なぜかということですね。耕地はほとんどございませんから、いわゆる物の生産ではなしに、明科は川が集まつてくる場所ということもあって流逝とかいろんなことを考えながら、なぜそこにあったのかということを考えていかなければいけないと思っております。

最近ちょっと面白い資料が入りました。飛騨の古川というところに、寿楽寺廃寺（じゅらくじはいじ）という寺院の遺構がありまして、太江（たいえ）遺跡⁽⁴⁸⁾というのが今の名前でございます。この遺跡からは、明科廃寺と全く同じ模様の瓦が出土しております⁽⁴⁹⁾（資料-7）。

先だって桐原先生が雑誌「信濃」に、明科の地は古代安曇郡の高家郷（たきべごう）であるという一文を書いておられます⁽⁵⁰⁾、その太江遺跡からは「高家寺」と書いた瓦等が出ておりまして、そこにも高家郷があってですね、なんて読むかはまだはっきりしませんが、太江というのが現在の地名ですので、多分タイエと呼ばれていたと思いますが、そこに郷寺の高家寺というのがあったようです⁽⁵¹⁾。

ですので、全くそれと同じ非常に特殊な文様の瓦でございますけれども、それが明科でも出ておりますので、桐原先生の高家郷が明科にあったという説が、非常になんか濃厚になってきたのかなというのが今思っているところでございます。

桐原：はい、どうもありがとうございました。奈良・平安時代の松本平は、文献のほうでは天武天皇が行宮を造ったり⁽⁵²⁾、平安の初め、延暦年間に国府が移ってきたり、東山道が通つていて、覚志（かがし）や錦織（にしごり）の駅家が造られたり⁽⁵³⁾、いろんなことが判つております。文献と遺跡の分布を併せてお考えいただけばありがたいことと思っております。では中世に移ります。

8 「中世」

桐原：つい最近まで一般の方々には、考古学の守備範囲はせいぜいで古墳時代だろうと思われておりました。それが奈良・平安時代まで広がりましたが、まだ中世は考古学の範囲外だろうという意識が強うございます。ところが文化庁では最低中世の終わりまでは考古学調査をせよといっております。今まではそういう意識がありましたから、現在のところ中近世の調査は割合に遅れております。その中で安曇地域では割合に早くから中世の居館跡の発掘調査が進んでおります。山田さん、例をあげてください。

(中世の居館跡－豊科町吉野町館、鳥羽館)

山田：はい、豊科町では地図の21番、吉野町館（図-5 ●21）、それから22番の鳥羽館（図-5 ●22）というのを発掘しております。「館」というのはまわりに土塁という土を盛り上げた施設と堀を巡らした屋敷なんです。それぞれ発掘した結果、鳥羽館は15世紀の後半、吉野町館は16世紀の末に作られたことが遺物、焼き物からだいたい推定できました。一番大きな違いというのは何かと言いますと、鳥羽館の堀は幅が5m、深さが2mで、V字型だったんですけども吉野町館のほうは幅2m、深さ1mのU字型という規模の小さいものになっていました。吉野町館の16世紀末というのはもう戦国時代が終わりになる頃、戦いが少なくなってきた頃だからこういう堀になってきたのかなということも考えております。豊科町では他に梶海波遺跡（図-5 ●23）というお寺に関係した遺跡、上手木戸遺跡（図-5 ●20）という農村集落の遺跡も掘ってますけれども、それぞれ出てくる焼物とか道具とかが違ってます。松本とかでも最近城下町関係の遺跡を掘っていますけれども、比べてみると非常に面白くなるんじゃないかなという気がしております。



鳥羽館遺跡全景

桐原：同じような居館跡の調査は北安曇でも行われております。島田さんがいくつか調査しておりますが、これについては略します。ただひとつ、島田さんにお願いしたいのが、中世の寺跡の調査です。山寺廃寺跡（図-5 ●1）。山寺は文献にもいくつか出てまいります。文献に出てくる山寺を実際に発掘しているのは、日本的に見ても数少ないかなあと思っています。島田さん、山寺のちょっと概略を話してください。

(大町市の山寺廃寺)

島田：山寺廃寺は、大町でもどちらかと言うと東のはうの山の中になります。昭和34年に古瀬戸の瓶子2個、四耳壺1個、青白磁の水注1個の藏骨器が見つかったお寺跡です。資料図に調査の図が載っておりますが（資料-8）、全体でお寺の面積が5万平米という広さです。その5万平米の中にお寺の跡、僧房の跡、墓地の跡というふうに分かれています。だいたい1,4,6と書いてあるところが僧房の跡で、5と10がお堂の跡、だんだんと山のてっぺんに上がっていくにつれて7,9,8,12にはお墓が群在しています。この遺跡からは大町全体が見渡せますので、この地方の権力者に関係があるのではないかと思います。こんな山の中にお寺があるという例から、山寺という地名が付いたわけでございます。まあこのような例は波田町の元寺場⁽³⁰⁾や県内にも何ヶ所かございます。その先駆けになったのかなあと思っております。

桐原：どうもありがとうございました。以上で中世までは本当の駆け足でやってまいりました。考古学はモノを通して人間を研究する学問ですから、中世で切ることはない。近世都市の調査、産業革命後の遺跡調査、今次大戦の戦争遺跡の調査など、みな大きな意義を持っています。

松本城下町の調査や昨年まで行われていた林城裏手の地下工場跡の調査⁽³¹⁾も話してもらいたいのですが、時間がありません。樋口さん、どうぞ。返します。

樋口：純文がちょっと長すぎてしまったために以下が非常に駆け足になってしましました。皆さんのが聞きたいところも、これはと思うようなところもたくさんあったんじゃないかなと思いますが、あと少し時間があります

ので、皆さんのご質問に答えるという形で最後にしたいと思いますので、よろしくお願いします。

9 「質疑応答」

司会：では今日のシンポジウムの内容に関しまして何かご質問がある方、挙手していただければマイクをお持ちいたしますので、何かござりますでしょうか。

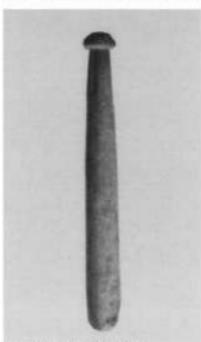
樋口：どうぞ、遠慮なくお手を挙げてください。はい。

質問者：市内で経営コンサルタントをやっている赤羽と申します。質問が2点あります。まず1点は、例えば環状集落は住居が真ん中に無いということですね、それとあと土偶を壟して祀りをしていたっていうこと、あと、中世の頃は寺が少なかったということです。そういうことを考えると、松本平はアニミズムというか神による精神性というか、そういうものがすごく高かったんじゃないかなと思われるんですけども、それが他に判る事象というかそういうものがあれば教えていただきたい。

もう1点は、桐原先生がこの分布図は非常に重要だとおっしゃいましたが、分布図をトータルでちょっと見てみると、豊科とか松本市新橋あたりが中世になるまで集落の分布というかそういうものがないんですけども、奈良とか平安の律令制あたりから例えば窯のような生産遺跡はあるんですけども、奈良時代までにそういう集落の分布が無いというのは、犀川の氾濫とかそういうものがあるからなんでしょうか。その2点を教えていただきたいんですが。

樋口：どうもありがとうございました。環状集落、土偶、それからこの2つについて何か松本平が特殊な世界だったのかというお話を。小林さん、これはどうですか。

小林：環状集落は東日本全域に分布が見られるので、縄文時代中期以降の特徴的な集落形態であった、と言えますかと思います。土偶につきましては、特に松本平で多いというのは縄文時代の中後期半でして、それ以降についてはそれほど多くありません。東北地方に行きますと、後晩期、特に晩期の遮光器土偶に象徴されるように晩期の土偶が非常にたくさん出ます。ということで、土偶の分布につきましても各時代によって濃淡があるというように考えております。たまたま縄文時代中期後半には松本平で土偶の祀りが良く行われていたといふ



はうろく屋敷遺跡出土石棒

ことが土偶の出土量によってわかるということかなと思います。じゃあ他のところで土偶の祀りが無かったかというと決してそうではなくて、数は少ないですけれども土偶の祀りは行われていたと考えています。この松本平が特に精神性が高い地域であったかというお話もありましたが、縄文時代は全般的に呪術世界、呪いの世界観があったと言われておりますので、とりわけここだけが精神性の高まった祀りを行っていたというような地域性を言うにはちょっと無理があるかなと思います。ちょっと私から振らせていただきますが、縄文時代の呪いの道具の中で土偶と共に双璧を成すものに石棒がございますので、できれば大澤さんのところで石棒の話をちょっとしていただければ、土偶とセットの話になるかなと思いますけれども。

大澤：先ほど弥生の再葬墓のところでお話しましたほうろく屋敷遺跡ですが、この遺跡は、実は縄文時代中期を中心とした非常に大きな遺跡でもあります。ちょうど同じ頃に、今は中央自動車道の下になってしましました北村遺跡（図1-●4）で大量の縄文時代の人骨が出来て、大変話題になりましたから皆さん記憶に留めていらっしゃると思います。ちょうどそれと同じ頃に同じ時代の、ほうろく屋敷遺跡も同じ頃に掘りました。北村遺跡とほうろく屋敷は距離的に10キロ弱の距離ですが、非常に特徴的な対照的な遺跡です。ほうろく屋敷遺跡というのは住居の数はせいぜい2万平米掘っても100軒に満たないようなところですが、非常に大量の土器とか石器が出てきました。特に石器のうち打製石斧が3千点ちかくありました。一方、北村遺跡では、住居もお墓もたくさん出ましたが、出土した土器も石器も非常に少なかったというのが特徴でした。そういう

中ではうろく屋敷遺跡の中に、非常にお呪いに使ったと言われるような道具もたくさんありました。その中で特徴的なのが男性のシンボルといわれる「石棒」です。中期の頃は非常に大型のものがあり、ほうろく屋敷でも相当たくさんの数が出来て、その中で一番大きなのが長さ1m10cmございます。頭に彫刻が施してあったりして、非常にマジカルな雰囲気のある道具なんです。これが環状集落の中心部のイエのない部分に大きな穴が掘ってあり、その穴の中に倒れておりました。おそらくその穴の上にこう立ててですね、下を石で補強したような感じでそれがひっくり返ったというようになっておりました。たぶんその集落の真ん中でお祀りをするためにそこに大きな石棒を立ててですね、なんらかの呪いをしたんじゃないかというような出土の状況を示しておりました。それが特徴でございます。

樋口：ありがとうございました。土偶から石棒まで関係のある遺物。この石棒はすばらしいものです。是非皆さんも見ていただきたいと思います。長野県下、全国的にも最もいい石棒じゃないかというくらいすばらしいものです。で、先ほどの質問の中にもうひとつ中世の寺の少ない、寺院が少ないというがありましたですね、それについては桐原さんにちょっと一言短く。

桐原：考古学で精神面まで考えろというのは無いものねだりです。ところで古代の寺院については宗教面で考えるよりも政治面で考えていただきたい。中央との関係に重点を置いて考えたらいかがかと思っております。中世になりますと、どの地域でも宗教心が高まっております。たまたま松本平では好資料が見つかって、調査されています。そんな程度での話でよいのではないでしょうか。

樋口：それからもうひとつ、分布図の問題がありましたね、分布の問題、これについて私の方でまとめてお話しをおきますが、さきほど縄文の時に話をしましたように、松本平のあの工場団地の地下2m下から縄文中期の集落が出てているんです。ですから私は安曇平、穂高や豊科のほうも、遺跡が無いんじゃないなくてあの下に相当埋まっているんじゃないかという感じがします。ですからこれから先まだ遺跡の分布というのは簡単に今見て無いからというだけじゃダメで、今後もう少し下の方を深く掘ったりする開発やなんかで出てくる機会が多いんじゃないでしょうか。

一番いい例が皆さんご存知の県立歴史館がある近くの高速道路の下はなんと現地表から7m下に縄文中期の屋代（やしろ）遺跡が出てきているわけです。千曲川流域です。長野市の松原（まつばら）遺跡⁽⁵⁰⁾では5m下です。もっと下に実は縄文前期の遺跡があつただろうけども湧水でもう掘れなくなっちゃってやめましたが。

樋口：では、最後にお一人質問を受けますが。どうですか、よろしいですか。それでは、私のほうから最後のまとめをしたいと思います。こういう企画をしてから全員集まることは本当に今日が初めてなんです。みんな集まって相談するってことができなかったわけです。非常にいい企画だというわけで私も喜んで、桐原先生と私が話をしたんですが、やってみて気が付いたことはやはりちょっと欲張っちゃったなということですね。こんな旧石器から全部やることが間違いだった。少なくとも今日は弥生ぐらいまでにしておけばですね、もっと若い研究者の意見も出せたんじゃないかなと。それと年寄りはみんなそうですがね、今日はどうも桐原さんも私も喋り過ぎのところがありまして、なんか若い人たちを充分に活用できなかった。非常に反省しております。しかし、こういう風にしてですね。松本平の広域の研究者達が集まって、お互いに喧々諤々⁽⁵¹⁾の議論ができるような機会っていうのはこれからも必要だなというふうに考えました。これに懲りずに、また松本市のほうでもいろんなことを教えてくれるんじゃないかなと思いますが、是非ご参加願いたいと思います。

本当に今日は長時間私達コーディネーターのやり方が多少慣れなかったもんですから、充分ではなかった点をお詫びします。そして今日各市町村から来ていただいた若い研究者の方々にもその点、ご不満があるかと思いますがお許し願いたいと思います。それでは私達壇上の者から厚く皆さんにお礼申しあげます。ありがとうございました。

司会：えー 大変いい企画ということで進めさせていただいたんですけども、事務局のほうがちょっと読みが甘かったものですから、大変欲張ってしまいましてこういうことになってしまいました。これは単に事務局の責任だと思います。先生方、本当にいい企画に乗っていただいたんですけども、ちょっと事務局が甘かっ

たということでご勘弁いただきたいと思います。今日あがたの森に参加していただいた方、ご清聴大変ありがとうございました。それで先生方も大変お忙しい中お集まりいただきまして、本当に今日はいいお話を聞けたなというふうに個人的には感じております。またこういう機会が持てましたら是非ご協力のほうをお願いしたいと思います。本日はどうも大変ありがとうございました。

註

- (1) 中山出張所、公民館の移転に伴う松本市立考古博物館の施設改修にあたり、改修及び今後の施設運営のあり方について、有識者や市民の代表から意見を求めるため、平成14年7月から9月にかけて6名の委員による「松本市立考古博物館のあり方懇話会」を設置し、3回の協議を行い、松本市に提言をいただいた。
- (2) 鳥居龍藏(1870~1953)は徳島市生まれ。独学で人類学を学び、大正13年に東京帝国大学助教授を辞し、鳥居人類学研究所を設立。北京の燕京大学の客員教授に招かれ、太平洋戦争も中国に滞在。日本だけでなく朝鮮半島、中国、モンゴル、台湾ほか世界各地を精力的に調査し、日本における考古学、人類学の先駆者として知られている。
- (3) クマンバ遺跡は大町市平、青木湖北側に面した遺跡で、昭和38・39年に発掘調査を行った。
- (4) 放射性炭素年代測定法、C14法ともいう。生物遺骸に含まれる炭素14(C14)が5730年を周期に半減していく性質を利用して遺物の年代を測定する方法
- (5) 正式名称は財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田963-4
電話 026-293-5926
- (6) 正式名称は国営アルプスあづみの公園。北アルプスのふもと安曇野地域に整備した自然の中での多様なレクリエーション機能を持つ都市公園。大町・松川地区と堀金・池高地区の二ヶ所に整備され、山ノ神遺跡は前者の開発に伴い発掘調査が行われた。
- (7) 「国営あづみの公園づくりと文化財の活用」をテーマに、平成16年9月25・26日に「フォーラムあづみの」が開催され、その一環としてシンポジウムが行なわれた。その詳細は『フォーラムあづみの記録集』(国土交通省関東地方整備局国営アルプスあづみの公園事務所 平成17年2月28日)に掲載されている。
- (8) 正式名称は長野県総合教育センター
〒399-0711 長野県旗尻市片丘南岸沢6342-4
電話 0263-53-8800
- (9) 大場義雄(1899~1975)は東京生まれ。國學院大學を卒業し、折口信夫の民俗学に傾倒する。神道考古学を提唱し、祭祀に関わる考古学、民俗学を専門とした。
- (10) 北安曇郡及び大町市を指す。長野県の北西部、富山県及び新潟県と隣接する地方。西側は北アルプスが県境となっている。
- (11) 安曇野ちひろ美術館を指す。平成9年に開館。平成13年には新館が開館した。
〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原
電話 0261-62-0772
- (12) 福井県金津町にある桑野(くわの)遺跡。縄文時代早期末から前期初頭にかけての遺跡で、墓と推定される土坑から石製装身具が81点出土した。これと同じものが中国やロシアで見つかっていることから、大陸の玉文化が日本に伝播したと考えられている。
- (13) 大湯環状列石。秋田県鹿角市十和田大湯字野中堂、字万座に所在し、100基以上の配石遺構をもつ。日本最大のストーンサークルといわれる。
- (14) 阿久遺跡は、長野県飯綱郡原村柏木に所在し、昭和50年に中央自動車道の建設に伴い発見された。縄文時代前期の大規模な環状石遺構をもつことがわかり、昭和54年に国史跡に指定され、盛土により保存されている。
- (15) 正式名称は長野県立歴史館
〒387-0007 長野県千曲市大字屋代字清水 科野の里歴史公園内
電話 026-274-2000
- (16) 平成15年10月4日から11月9日かけて朝日美術館(〒390-1104長野県東筑摩郡朝日村 電話0263-99-2359)で「唐草文系上器の世界」が開催された。
- (17) 本郷村は、女鳥羽川上流の山間部と稻倉以南の中流域東側から浅間温泉、横田に広がる扇状地や河岸段丘の平坦地一帯をいい、昭和49年(1974)に松本市と合併をした。
- (18) 曽利皿式。曾利式は縄文時代中期後半の様式で、諏訪郡富士見町曾利(そり)遺跡の出土遺物を標式とし、5段階に分けられる。富士山と八ヶ岳を取り巻く関東平野西部の丘陵地帯、神奈川県全域、静岡県東部の山岳地帯や伊豆半島、山梨県全

- 域、長野県八ヶ岳西南麓に分布する。
- (19) 人間が生活していくうえで欠くことのできない塩が運ばれた海岸部から内陸部を結ぶ道を「塩の道」といい、塩だけでなく文化や信仰、生活習慣などが運ばれ文化圏を形成していた。ここでは、糸魚川から松本をつなぐ千国街道を指す。
- (20) 小林康男「地域の中での土偶のあり方」『地域と文化の考古学 I 明治大学考古学専攻創設55周年記念論文集』明治大学文学部考古学研究室 六一書房 平成17年
- (21) 国立歴史民俗博物館
〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117
電話 043-486-0123
- (22) 重要文化財馬場家住宅
〒399-0023 松本市内田357-6
電話 0263-85-5070
- (23) 藤岡神社遺跡は、栃木県下都賀郡藤岡町大字藤岡字城山に所在する绳文時代中期から後期にかけての遺跡
- (24) 古出泰幸「土製粘状耳飾の地理的分布と通婚図」長野県考古学会誌105号 平成16年5月10日発行
- (25) 平成12年に茅野市湖東山口の中ノ原（なかっぽら）遺跡でほぼ完全な形で出土した。通称、仮面土偶と呼ばれる。高さ34cm。平成16年に長野県宝、平成18年に国重要文化財に指定。
- (26) 「弥生農耕の起源と東アジア・炭素年代測定による高精度編年体系の構築ー」平成16~20年文部科学省科学研究費補助金学術創成研究費 (2) 平成16年度研究成果報告 西本豊弘（国立歴史民俗博物館研究部教授） 平成17年に女鳥羽川遺跡出土の土器付着物の放射性炭素年代測定結果が掲載されている。(44~45 p) それによれば、91.8%の確率でBC1,260~1,010年という数値が出ている。
- (27) 平成15年、当時国立歴史民俗博物館にいた春成秀爾（はるなり・ひでじ）氏は、加速器質量計（AMS）を使った放射性炭素年代測定法により、弥生時代の始期が従来の定説よりも500年早いという研究成果を発表した。
- (28) 日本の歴史を、天皇を中心とする団体の発展ととらえる歴史概
- (29) メルクマールは、ドイツ語で指標、目印のこと
- (30) 庄ノ畑遺跡は岡谷市銀座2丁目に所在し、弥生時代中期前葉の庄ノ畑式土器の模式遺跡
- (31) 果林遺跡は中野市果林北原に所在し、千曲川の河岸段丘上に広がる弥生時代中期後半の遺跡。弥生時代中期後葉の果林式土器の模式遺跡。昭和35年に県史跡に指定された。
- (32) 佐原真は大阪市生まれ。大阪外国语大学を経て京都大学大学院で考古学を専攻。研究範囲は幅広く、分かりやすく面白い考古学を提唱し、考古学の普及、啓発に尽力した。
- (33) 郡（ひょう・こおり）は奈良時代の律令制における地方行政の単位。国の下に設置され、郡の下に郷、里が設置された。安曇郡と筑摩郡は信濃国にかつて存在した郡で、前者は現在の安曇野市周辺、後者は国府のあった松本を中心とした地域とされる。
- (34) 本シンポジウムは、第26回あがたの森考古学ゼミナールの第1回として開催されたが、引き続き、7月10日に第2回として「北信から見た弘法山古墳」（青木一男・千曲市立埴生小学校教諭）、7月17日に第3回として「南信から見た弘法山古墳」（山下誠一・飯田市立上郷考古博物館学芸員）の講座が開催された。
- (35) 丸山古墳は本書に掲載されていないが、松本市里山辺（藤井）597-3、美ヶ原温泉奥の藤井沢の上流に位置している。大正9年に二木隠藏によって発掘され、出土品の大半は東京帝室博物館（現在の東京国立博物館）に寄贈されている。平成3年に砂防ダム工事による埋没のため松本市教育委員会が発掘調査を行った。詳細は「松本市里山辺 丸山古墳-緊急発掘調査報告書一」 平成5年 松本市教育委員会（松本市文化財調査報告No104）を参照。
- (36) 秋葉原古墳群は本書に掲載されていないが、安曇古墳群の東方800m、松本電鉄上高地線新村駅と小野神社の間に散在している終末期の5基の古墳群をさす。詳細は「松本市新村秋葉原遺跡-緊急発掘調査報告書一」 昭和58年 長野県中信土地改良事務所・松本市教育委員会（松本市文化財調査報告No26）を参照。
- (37) 有明古墳群は安曇野市穂高有明にある群集墳で、穗高古墳群（A～H群）のA～D群をさす。本書の図2 ▲7-9-11-15は有明古墳群の一部である。D群の鶴石岩窟（ぎしきのいわや）古墳は、大正時代に鳥居龍藏によって「ドルメン式古墳」の名称で紹介されている。古墳時代後期6世紀末から7世紀頃の集造とされ、安曇野の開発に携わった安曇氏のものと考えられている。
- (38) 胴沢新町（こまざわしんまち）遺跡。長野市上胴沢新町に所在し、古墳時代の5世紀代の農耕祭祀の遺構を持つ遺跡として知られる。
- (39) 新井大ロフ（あらいだいろふ）遺跡。中野市新井大ロフに所在し、古墳時代中期の祭祀遺構を持つ遺跡として知られる。
- (40) 中子塚境（ちゅうしづかさかい）遺跡。上高井郡小布施町中子塚に所在し、古墳時代中期の祭祀遺構を持つ遺跡として知られる。

- (41) 青木下遺跡。坂城町南条に所在する古墳時代の遺跡。大量の須恵器が発掘され、とくに7世紀前半には大壺を取り巻くよう
に土器が環状に並べられた祭祀遺構が見つかっている。
- (42) 高宮遺跡は、現在まで下記のとおり4回の調査を実施している。
- 第1次調査 平成5年5~12月
第2次調査 平成9年4~6月
第3次調査 平成15年8~9月
第4次調査 平成15年10月
- (43) JR南松本駅と国道19号線との交差点（南松本交差点）を結ぶ道路を隔てて北側（南松本1・2丁目、双葉の一部）を出川西遺跡、
南側（双葉、芳野町、出川町の一一部）を出川南遺跡と区分し、いずれも弥生、古墳時代から平安時代の大集落跡が見つ
かっている。
- (44) 平田里古墳群。出川南遺跡の第4次調査（平成3年10月～4年3月）で、5世紀後半から6世紀初頭の築造と考えられる3基の古
墳が発見された。
- (45) 安曇野市明科東川手に所在する潮神明宮前遺跡（国-3 ●8）。古墳時代後期（7世紀末）の築造とされる古墳群がある。
- (46) かつて松本市両田の田植池周辺から窯跡が発見されたことから、近くの松本市島内の山田集落の名をとり山田窯跡群とよ
ばれたが、その後隣接する豊科町、四賀村一帯に窯跡の存在が確認されたため、現在ではこれらを総称して北部古窯跡群とよ
ばれている。
- (47) 小林計一郎氏は、長野郷土史研究会の初代会長。現在は名誉会長。同会は機関紙「長野」を刊行している。
- (48) 太江遺跡は岐阜県飛騨市古川町太江に所在し、寿楽寺廃寺とよばれる古代寺院の遺構を持つ遺跡として知られるが、出土
した墨書き土器から「高家寺（たいえいじ）」と呼ばれることや、周辺が平安時代の「高家郷（たいえごう）」であることが判
明した。
- (49) 「太江遺跡・寿楽寺廃寺跡」 財団法人岐阜県文化財保護センター 平成14年
- (50) 桐原健「明科廃寺が提起する問題」『信濃』第54巻第12号 信濃史学会 平成14年12月20日発行
- (51) 「太江遺跡Ⅱ」 財団法人岐阜県文化財保護センター 平成17年
- (52) 「日本書紀」天武天皇13年、14年の条に、天武天皇が東闘（つかま）の湯への行幸を計画し、行宮を造営させたという記載
がある。
- (53) 信濃國府は当初、国分寺のある小県郡に置かれたと推定されているが、「和名類聚抄（わみょうるいじゅしょう）」に「国
府 在筑摩郡…」の記載があり、10世紀前半には筑摩郡に国府があったことがわかる。しかし国府が移転した時期につい
てははっきりせず、延暦9年に国司が二名任命されたこと、延暦14年に国司が小県郡の住人に射られるという事件が起きた
ことなどから、この時期に国府が移転したという説がある。
- 東山道は、大和朝廷が設置した官道で、都から美濃、信濃、上野、下野を経て陸奥まで通じていた。三十里ごとに駅が設
けられ、延喜式によれば筑摩郡には覚志、錦織の駅があった。覚志駅は塩尻市広丘堅石付近、松本市芳川村井町付近とい
う説があり、錦織駅は旧四賀村、岡田という説がある。
- (54) 元寺場遺跡。波田町には明治維新まで若沢寺（にゃくたくじ）という大寺院が存在したが、廃仏毀釈で取り壊され現存し
ない。伝承によれば、若沢寺は奈良時代後期に背後の白山山頂近くに創建され、のちに坂上田村麻呂により下方に移され、
さらに山麓へと移った。この最初の山頂近くの場所が元寺場とよばれ、発掘調査により、堂跡の遺構や遺物が見つかって
いる。
- (55) 近代遺跡山辺半地下工場。太平洋戦争末期の軍需工場跡で、松本市里山辺の林地区と大嵩崎地区にある。平成14年に県當
國場整備事業に伴う発掘調査で、図上で知られていた12ヶ所のうち、11ヶ所を確認した。
- (56) 松原遺跡は長野市松代町東寺尾字北堀ほかに所在。上信越自動車道の建設に伴い平成元年から3年にかけて発掘調査が行わ
れ、縄文時代前期末から弥生時代にかけての大規模な集落跡が見つかった。全国でも有数の石製装身具が多量に出土して
いる。

第26回あがたの森考古学セミナー 「松本平の発掘を語る。」遺跡一覧表

旧石器時代▲

エリニア番号	遺跡名	遺跡名	遺跡名	発行年
大町1	原井原遺跡	原井原	原井原	1992
大町2	SH1 - SH2 - SH3	クンバ	クンバ	1993
大町3	S40	三井学校	三井学校	1993
大町3	S59	北小学校	北小学校	1995
4	I15	すり坂	すり坂	1995
5	H8 - H9	山田	山田	1997

縄文時代 早岡△

エリニア番号	遺跡名	遺跡名	遺跡名	発行年
大町1	原井原	原井原	原井原	1992
2	HI3	原井原	原井原	1992
3	HT-12	山神	山神	1993
4	S41	山神1	山神1	1993
5	S58	山神2	山神2	1993
6	S34	山神3	山神3	1993
7	I5	山田	山田	1994
9	S56	山田	山田	1994
10	S59	山田	山田	1994
11	S60	山田台	山田台	1994

前期○

エリニア番号	遺跡名	遺跡名	遺跡名	発行年
大町1	原井原	原井原	原井原	1995
2	SH2 - SH3	上原	上原	—
3	I5 - I10 - I15	大崎	大崎	—
4	I16	原井1	原井1	—
5	S57 - I10	原井2	原井2	—
6	S40	原井3	原井3	—
7	S45	井川山社	井川山社	—
8	H9	高瀬	高瀬	—
9	S53 - H11	はうろく遺跡	はうろく遺跡	—
10	H11 - H15	上原遺	上原遺	—
11	H11	はうろく遺跡	はうろく遺跡	—
12	H6	下角	下角	—
13	S44	西戸	西戸	—
14	I56	川原遺	川原遺	—
15	I15	原井田	原井田	—
16	H80	西戸	西戸	—
17	H11	矢立山	矢立山	—

中間

エリニア番号	発表年	地図名	地図名	所在地	所見	参考文献	発行年	
大河町 1	1962-63	一作	小引ぎな	トビックス。	ヒスイ巣窟を含む、中段後から地表までの層は薄い。	一作	大河町教育委員会	1990
八幡町 2	1952	中里	金はら	中里段丘上石炭の層の露出。	中里ノロ	中里段丘上石炭の層の露出。	長野県立自然環境研究センター技術監修会	1979
明神町 3	1952	二坂	こじょさ	川手川	山地の谷筋に位置する。	川手川谷地の谷筋に位置する。	日本地質学会	1974
4	1962-63	北村	きみさら	北村	中段～地表の地表の露頭、入るなりや。	中段～地表の地表の露頭、入るなりや。	長野県立自然環境研究センター技術監修会	1979
猪苗町 5	1955	上野	かみいくのく	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
6	1958	新井・菅古	しんい・すが	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
7	1966	猪苗山	いのまわ	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
8	1961	新井	しんい	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
9	1951-12	新井	しんい	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
三郎町 10	1950	新井・菅古	しんい・すが	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
11	1955	新井	しんい	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
猪苗町 12	1950	菅原	すがわら	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
佐久町 13	1954	今川	いまかわ	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
14	1955-56	今川	いまかわ	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
15	1953	今川	いまかわ	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
16	1953	新井	しんい	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
17	1951	新井	しんい	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
18	1952	新井	しんい	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
19	1950-51	猪苗田	いのまわだ	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
猪苗町 20	1959-60	猪苗	いのまわ	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
21	1946	猪苗	いのまわ	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
22	1942-55(=1953)	三化廻	さんかくわい	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
23	1945-47	猪	いのまわ	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
猪苗町 24	1959-60	猪苗	いのまわ	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
25	1946-1948	猪の内	いのまわのうち	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
川越町 26	1971-72	猪苗	いのまわ	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
猪苗町 27	1944	小丸山	こまるやま	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
28	1944	猪	いのまわ	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
29	1953	小沢	こざわ	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
30	1958	特良	とくりょう	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
31	1950	田	た	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
32	1953	馬鹿	ばか	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971
33	1944	小沢	こざわ	猪苗町上野	中段～地表の地表の露頭。	中段～地表の地表の露頭。	日本地質学会	1971

奈良・平安時代

エリア番号	発生年	地名	説明文	登録地	参考文献	施行年	
松木	31 HI	石上	「小川がな いがくみ」 平安時代の地名。山の裏に水を供する川の見聞。	石上山道	「石上山道 路町 石上、奥出雲道」 「松木山道」	91. 松木山行郵便局 91. 松木山行郵便局	1991
32 HI	海田、高瀬	おだにこうせ	「安神寺平野の水路と水門の見聞。 上野谷合の水門の見聞。」	海田、内田	「安神寺平野の水路と水門の見聞。 上野谷合の水門の見聞。」	91. 小瀬郵便局 91. 小瀬郵便局	1991
33 HI	小瀬	こいせ	「佐賀代の水門の見聞。 大和御所の水門の見聞。」	小瀬	「佐賀代の水門の見聞。 大和御所の水門の見聞。」	91. 小瀬郵便局 91. 小瀬郵便局	1991
34 HI	内田	うちだ	「松木~宇摩子の水門の見聞。 宇摩子の水門の見聞。」	内田	「松木~宇摩子の水門の見聞。 宇摩子の水門の見聞。」	91. 内田郵便局 91. 内田郵便局	1991
35 HI	高瀬	たかせ	「井戸だまし」	高瀬	「井戸だまし」	91. 高瀬郵便局 91. 高瀬郵便局	1991
35 HI	小瀬	こいせ	「井戸だまし」	小瀬	「井戸だまし」	91. 小瀬郵便局 91. 小瀬郵便局	1991
36 HI	河原町	かわらまち	「井戸だまし」	河原町	「井戸だまし」	91. 河原町郵便局 91. 河原町郵便局	1991
36 HI	川原町	かわらまち	「井戸だまし」	川原町	「井戸だまし」	91. 川原町郵便局 91. 川原町郵便局	1991
36 HI	秀川	ひでかわ	「井戸だまし」	秀川	「井戸だまし」	91. 秀川郵便局 91. 秀川郵便局	1991
37 HI	中山	なかやま	「井戸だまし」	中山	「井戸だまし」	91. 中山郵便局 91. 中山郵便局	1991
38 HI	不所行方迷	ふそぎょくめい	「井戸だまし」	不所行方迷	「井戸だまし」	91. 不所行方迷郵便局 91. 不所行方迷郵便局	1991
38 HI	山野村	さんやまむら	「井戸だまし」	山野村	「井戸だまし」	91. 山野村郵便局 91. 山野村郵便局	1991
39 HI	内山	うちやま	「井戸だまし」	内山	「井戸だまし」	91. 内山郵便局 91. 内山郵便局	1991
40 SI	竹山	たけやま	「井戸だまし」	竹山	「井戸だまし」	91. 竹山郵便局 91. 竹山郵便局	1991
41 SI	竹山	たけやま	「井戸だまし」	竹山	「井戸だまし」	91. 竹山郵便局 91. 竹山郵便局	1991
42 SI	丹波国	たんばくに	「井戸だまし」	丹波国	「井戸だまし」	91. 丹波国郵便局 91. 丹波国郵便局	1991
42 SI	丹波國	たんばくに	「井戸だまし」	丹波國	「井戸だまし」	91. 丹波國郵便局 91. 丹波國郵便局	1991
43 SI	丹波國	たんばくに	「井戸だまし」	丹波國	「井戸だまし」	91. 丹波國郵便局 91. 丹波國郵便局	1991
44 SI	高山町	たかやまちょう	「井戸だまし」	高山町	「井戸だまし」	91. 高山町郵便局 91. 高山町郵便局	1991
44 SI	高木	たかぎ	「井戸だまし」	高木	「井戸だまし」	91. 高木郵便局 91. 高木郵便局	1991

中二世(近世)

ニアフ番号	発行年	地名	ふりがな	所在地	参考文献	年代
天都市 1	53(1944)-15	邊越毛等 山寺寺跡	やまとひはじあと	山寺町	トランクス 中央教育出版編集係の「学習用語を読む」に載る。『山寺寺跡』と題する。著者未詳。	1943
2.	857-1467-7-11	矢止の無価値	てしのむかわいじあと	山寺町	中生田川の左側に立派な土塁があることから。矢止の無価値	—
3.	865-143	小林沢	なかば	山寺町	山寺町新潟県立図書館の蔵書。著者不明。『山寺寺跡』と題する。著者未詳。	—
4.	865-143	中城原	なかじょうばら	山寺町	山寺町新潟県立図書館の蔵書。著者不明。『山寺寺跡』と題する。著者未詳。	—
5.	81	清水の無価値	しみずのむかわいじあと	山寺町	山寺町新潟県立図書館の蔵書。著者未詳。『山寺寺跡』と題する。著者未詳。	—
6.	81	古木の無価値	こきのむかわいじあと	山寺町	山寺町新潟県立図書館の蔵書。著者未詳。『山寺寺跡』と題する。著者未詳。	—
7.	81	古木の無価値 1	こきのむかわいじあと 1	山寺町	山寺町新潟県立図書館の蔵書。著者未詳。『山寺寺跡』と題する。著者未詳。	—
8.	85	鬼の無価値	おにのむかわいじあと	山寺町	山寺町新潟県立図書館の蔵書。著者未詳。『山寺寺跡』と題する。著者未詳。	—
9.	85-7-12	萬葉	まんげつ	山寺町	山寺町新潟県立図書館の蔵書。著者未詳。『山寺寺跡』と題する。著者未詳。	—
10.	81	北庄尼跡	きたうらみあと	平岡町	木村義徳著。『山寺寺跡』と題する。著者未詳。	—
11.	113	須坂跡	すざかあと	大門町	山寺町新潟県立図書館の蔵書。著者未詳。	—
12.	113	須坂跡	すざかあと	大門町	山寺町新潟県立図書館の蔵書。著者未詳。	—
13.	815	こや	かたびら	山寺町	山寺町新潟県立図書館の蔵書。著者未詳。	—
14.	823	こや	かたびら	山寺町	山寺町新潟県立図書館の蔵書。著者未詳。	—
15.	85	上山野	うさんや	山寺町	黒川(上山野)十日町の無価値の「萬」。黒川の無価値。	—
16.	H1. H15	上千野	うさんや	山寺町	中千野ノ原。黒川の無価値。	—
17.	H1	湖池の無價	こちのむかわい	山寺町	湖池の無價。	—
18.	859-61	萬葉記	まんげつけい	山寺町	萬葉記の記述。	—
19.	851-14	他伴	ほかみ	山寺町	はばか? どう?	—
20.	851	上千野	うさんや	山寺町	上千野。	—
21.	852	上千野	うさんや	山寺町	上千野。	—
22.	852	上千野	うさんや	山寺町	上千野。	—
23.	852	上千野	うさんや	山寺町	上千野。	—
24.	862	川本子方庭下	かわもとこかわぢ	山寺町	川本子方庭下。	—
25.	854-58	松本の元	まつのもと	山寺町	まつのもと。	—
26.	853	二の宮	ふたのみや	山寺町	さんみや。	—
27.	853	松本子の丸	まつのもとこまる	山寺町	まつのもとこまる。	—
28.	854	小原	おはら	山寺町	おはら。	—
29.	855	松木子と野路	まつぎことのじ	山寺町	まつぎことと。	—
30.	856	小原	おはら	山寺町	おはら。	—
31.	857	川内田畠	かわうちたけだ	山寺町	かわうちたけだ。	—
32.	857-13	松木三の丸	まつぎみのまる	山寺町	まつぎみのまる。	—
33.	812	新村	しんむら	山寺町	にいむら。	—
34.	914	山寺町	さんじょう	山寺町	山寺町の無価値を説く。	—
35.	912	元山寺	もとさんじ	山寺町	もとさんじ。	—
36.	912	山寺町	さんじょう	山寺町	さんじょう。	—
37.	947	新・山寺	しんさんじ	山寺町	新・山寺。	—
38.	944	新・山寺跡	しんさんじあと	山寺町	新・山寺跡。	—

昭和二十二年十二月

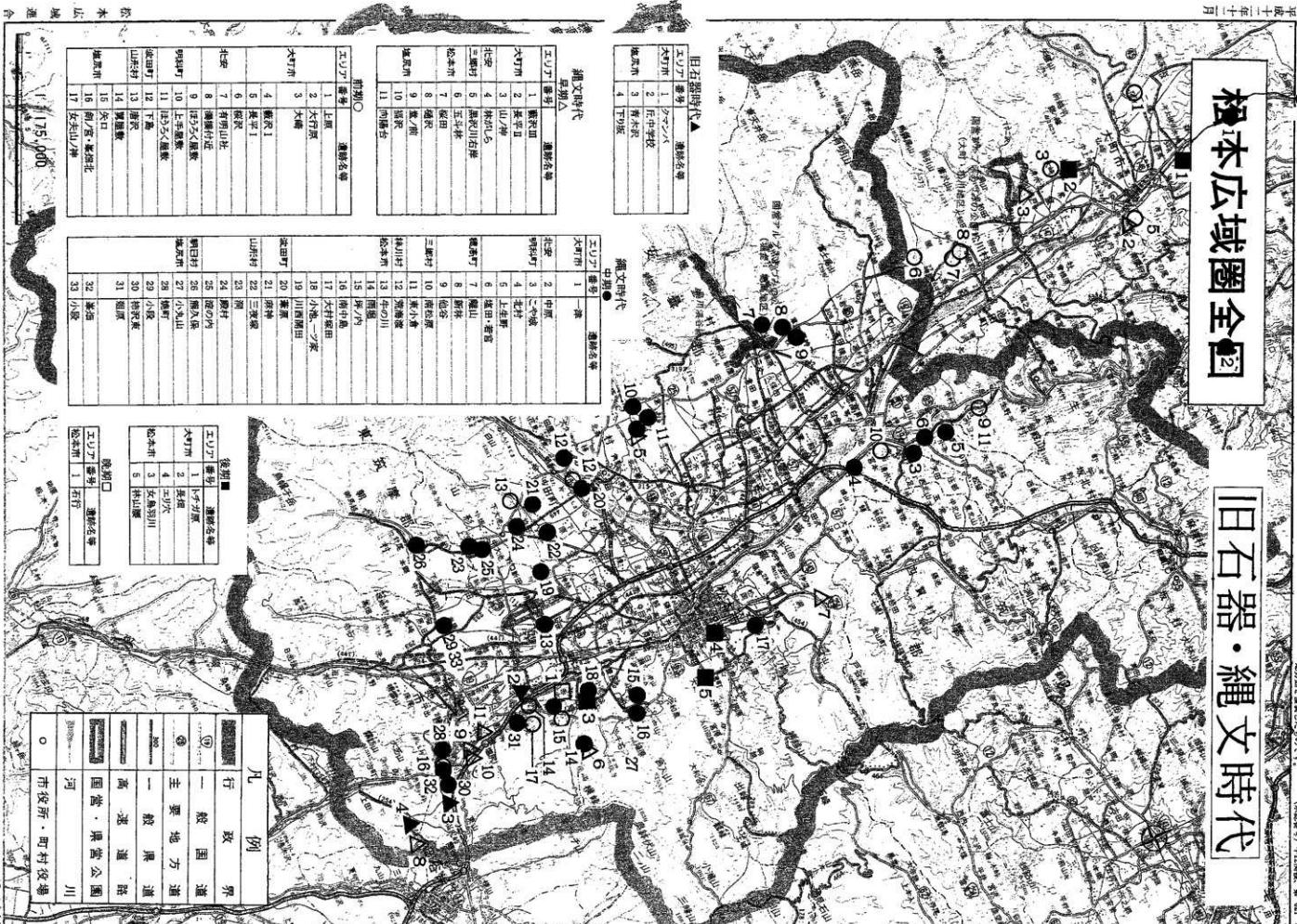
1
2
3
4

根本広域圏全図

旧石器・縄文時代

この付図は、地図を基にしたので、昭和廿一年の第62号

地図を基にしたので、昭和廿一年の第62号

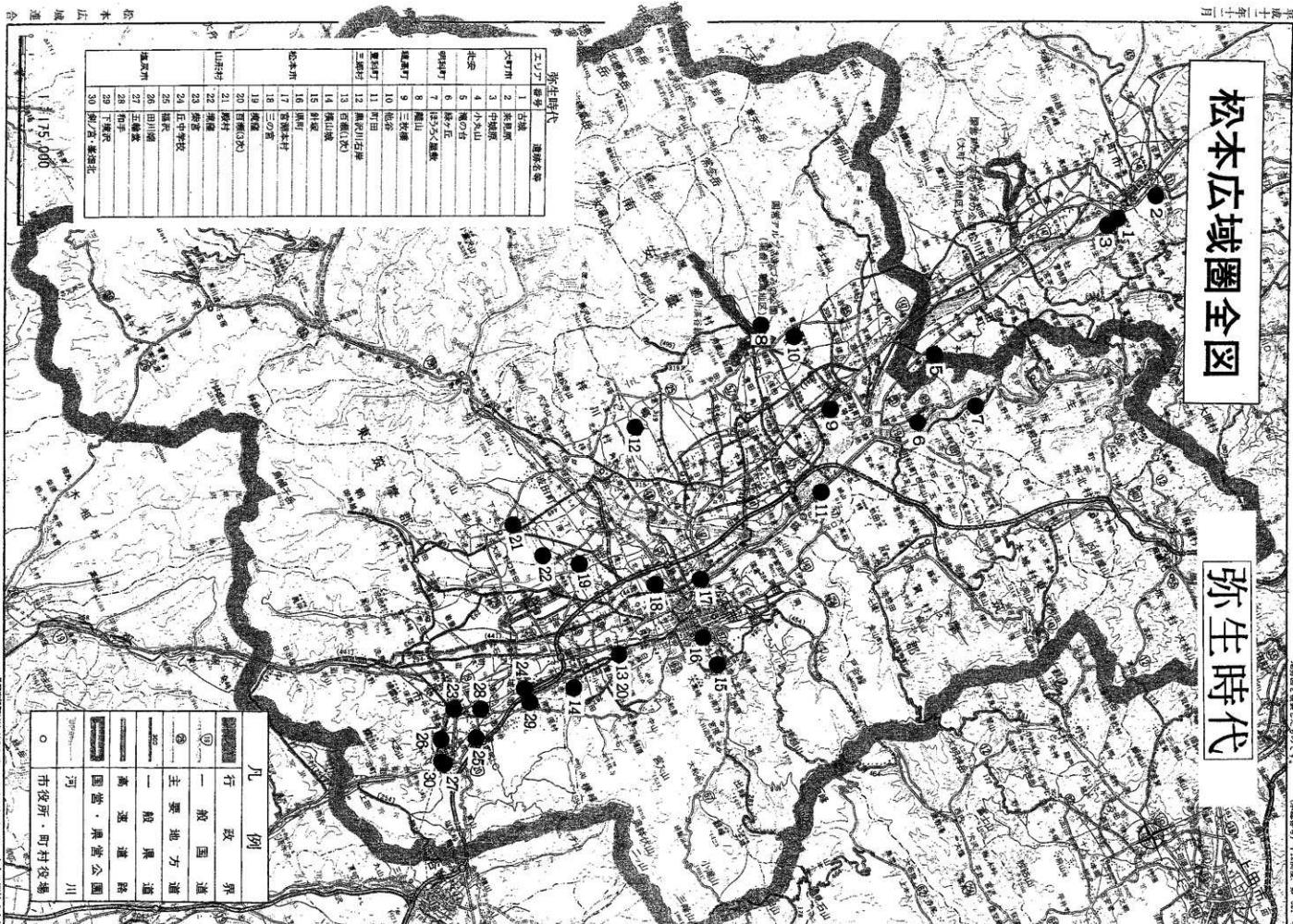


松本広域圏全図

弥生時代

昭和十一年一月

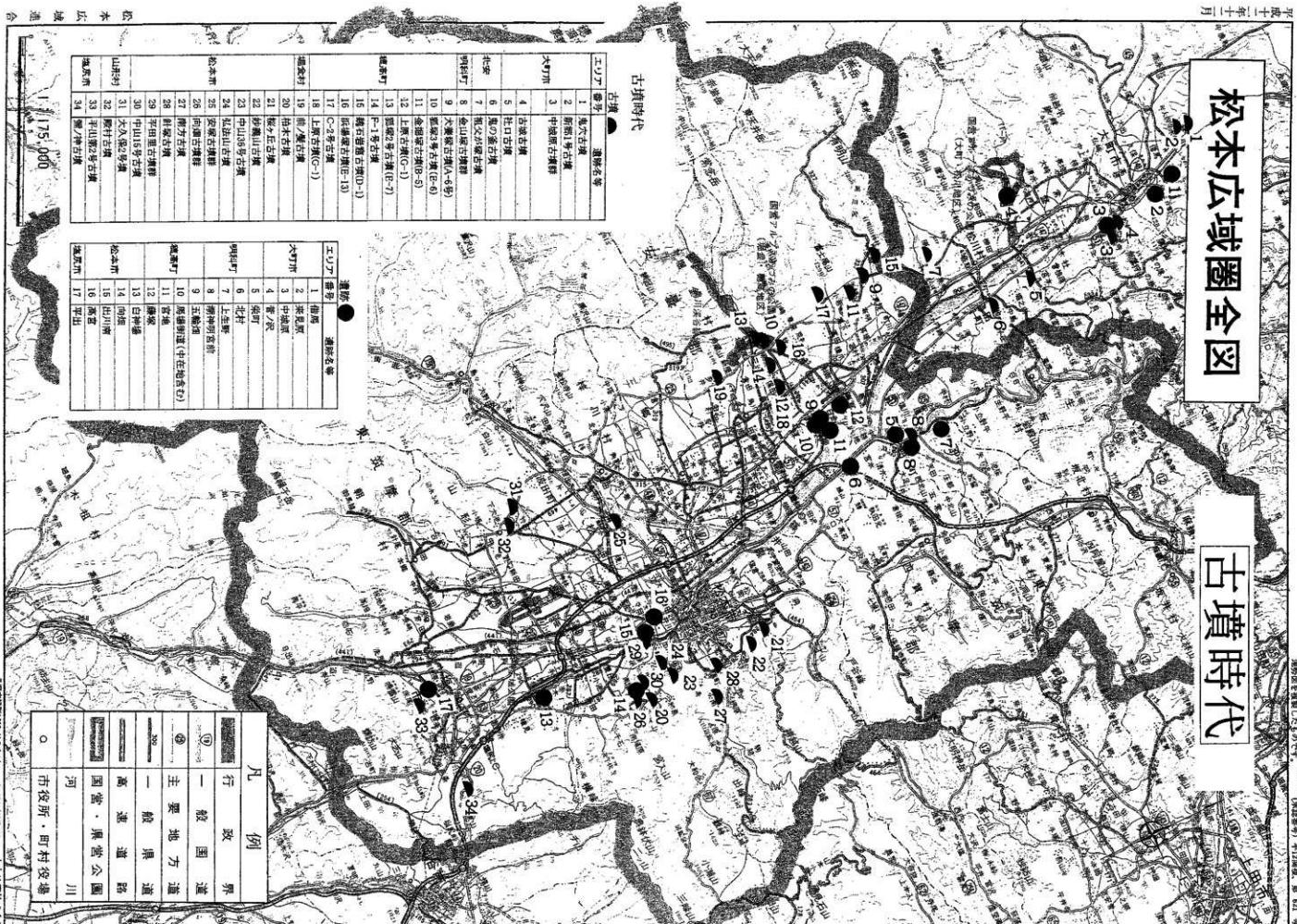
この地図は、権威ある歴史学者の考證を得て、昭和廿年(1945)年四月のもので、地圖改修後版たのである。



平成二十二年十一月

松本広域圏全図

古墳時代



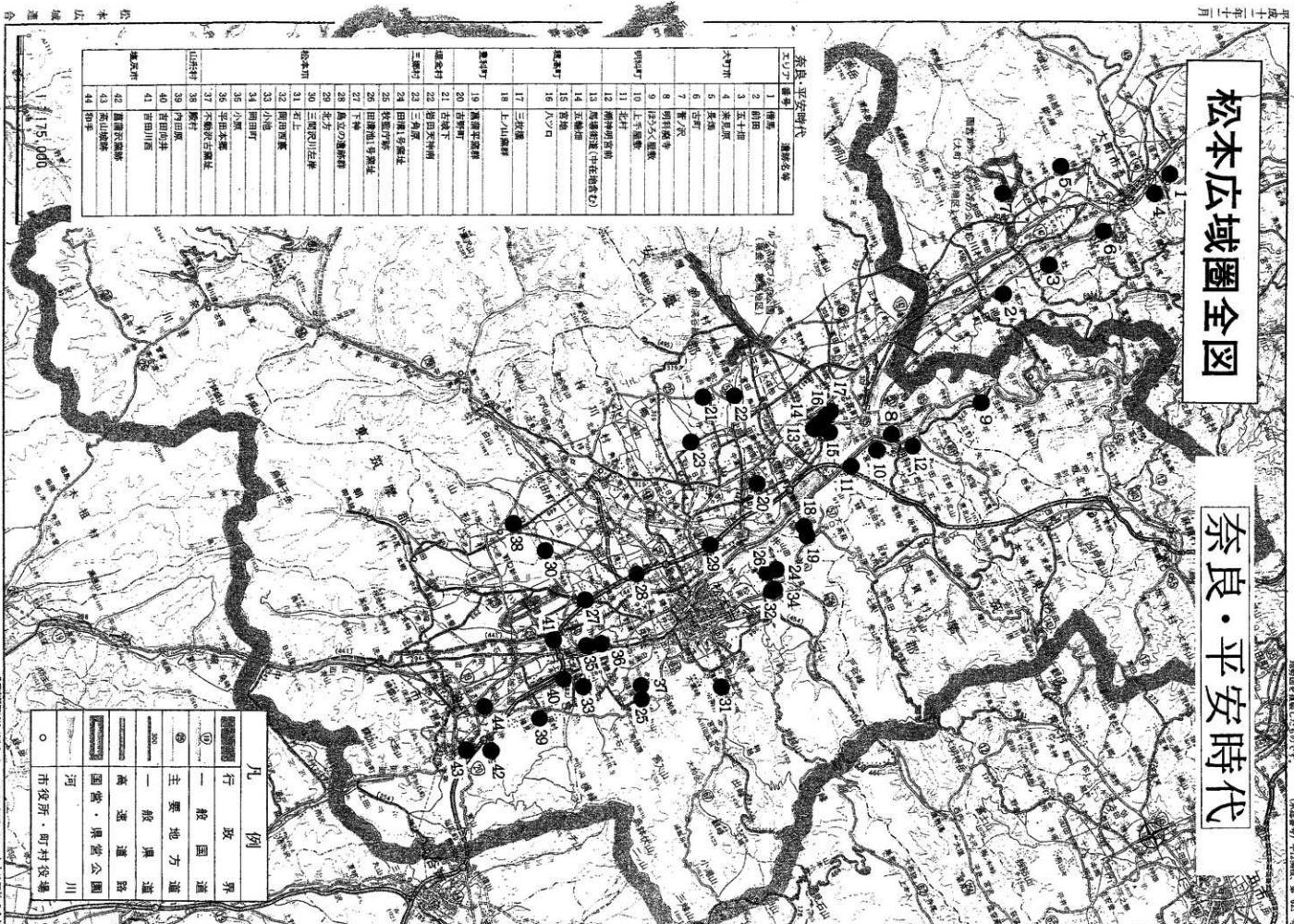
この地図は、農林省国土地理院版の測量を基に、同測量の約2万分の1

縮尺

松本広域圏全図

奈良・平安時代

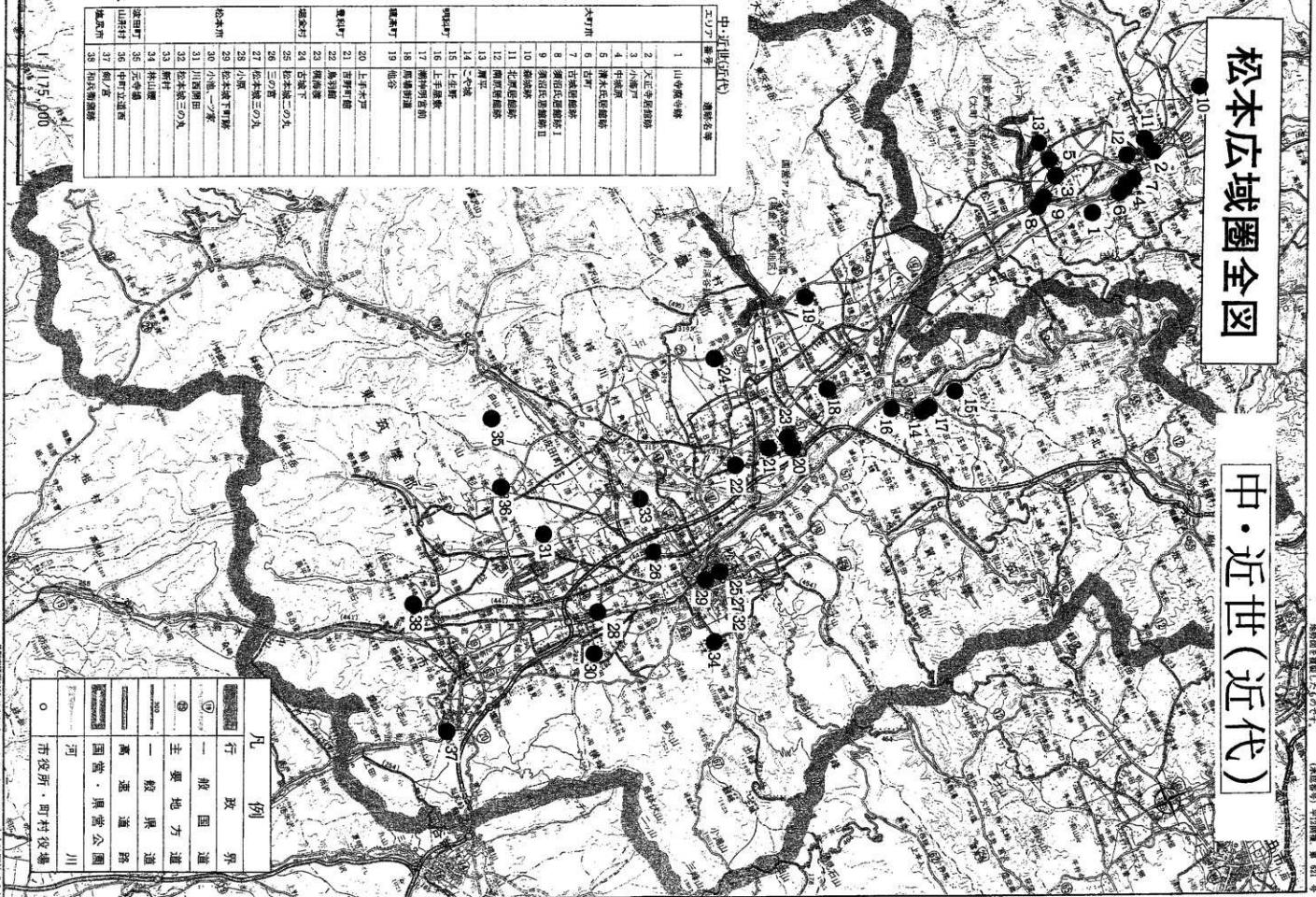
昭和十一年十一月

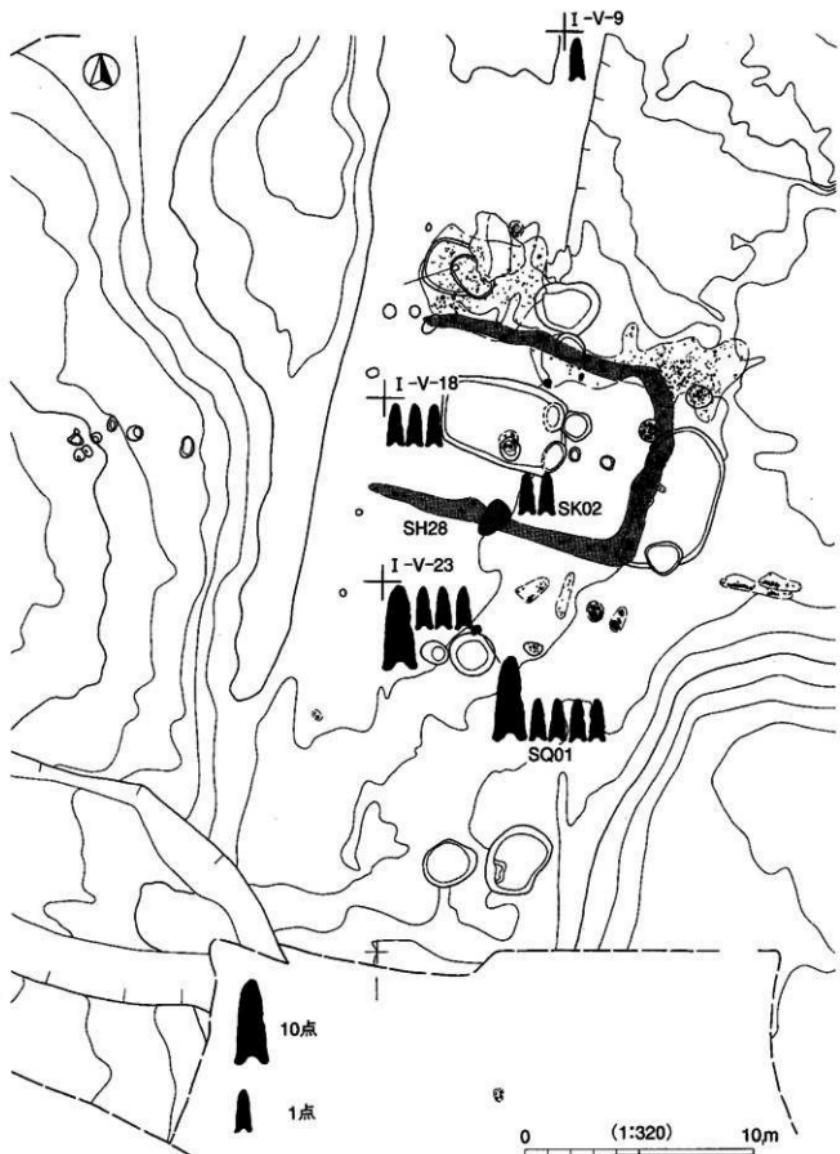


松本広域圏全図

中・近世(近代)

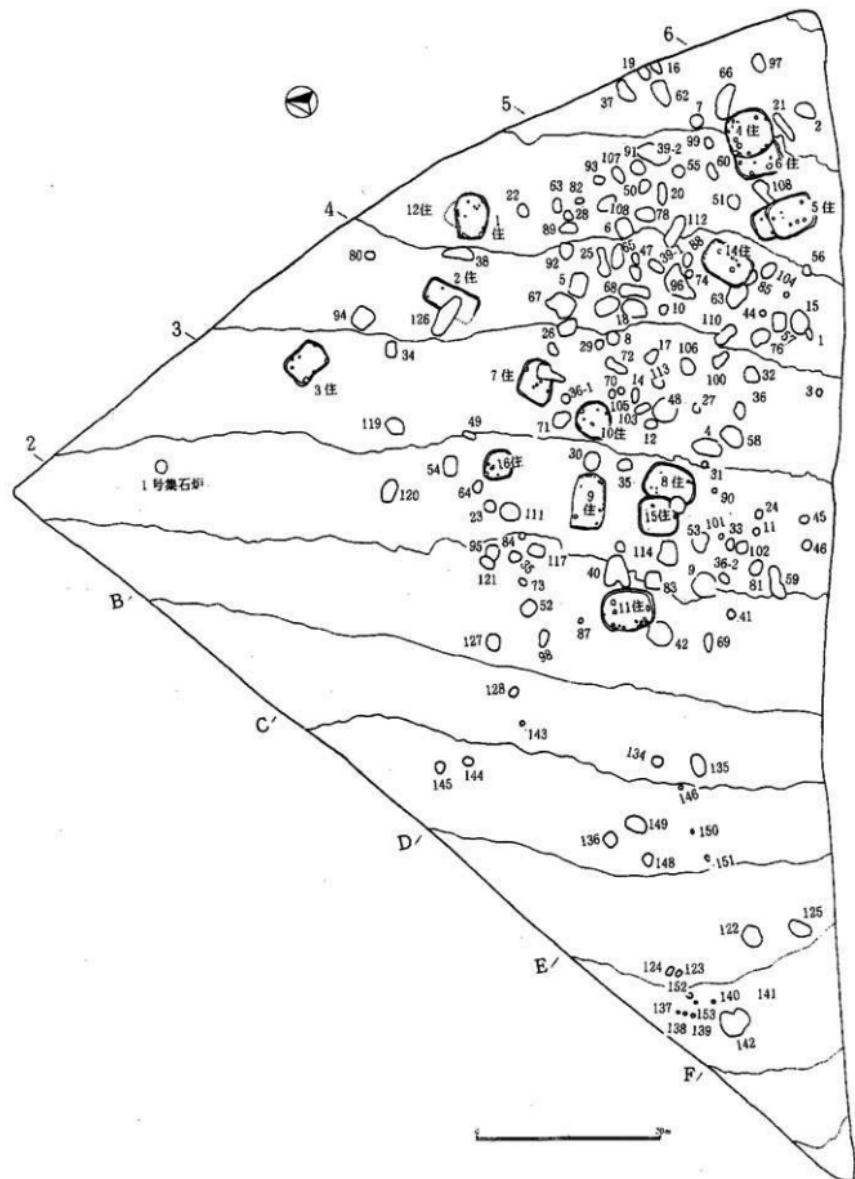
平成二十一年十一月



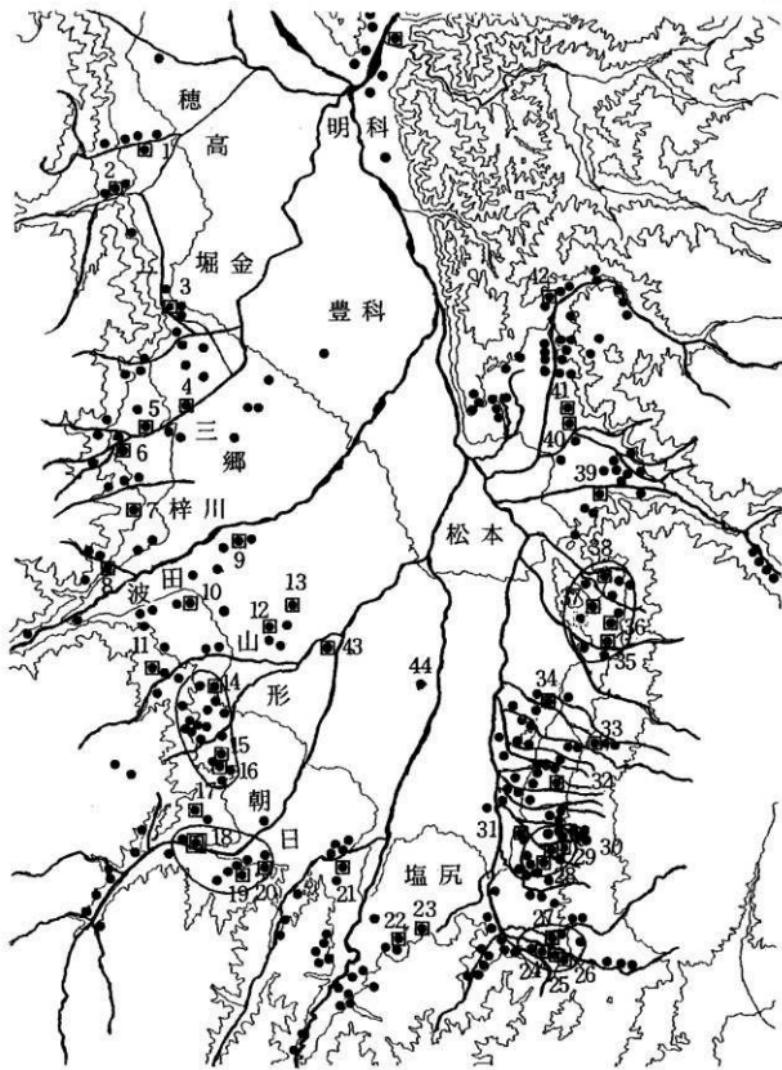


山の神遺跡石列SH28及び異形部分磨製石器出土分布

資料-2



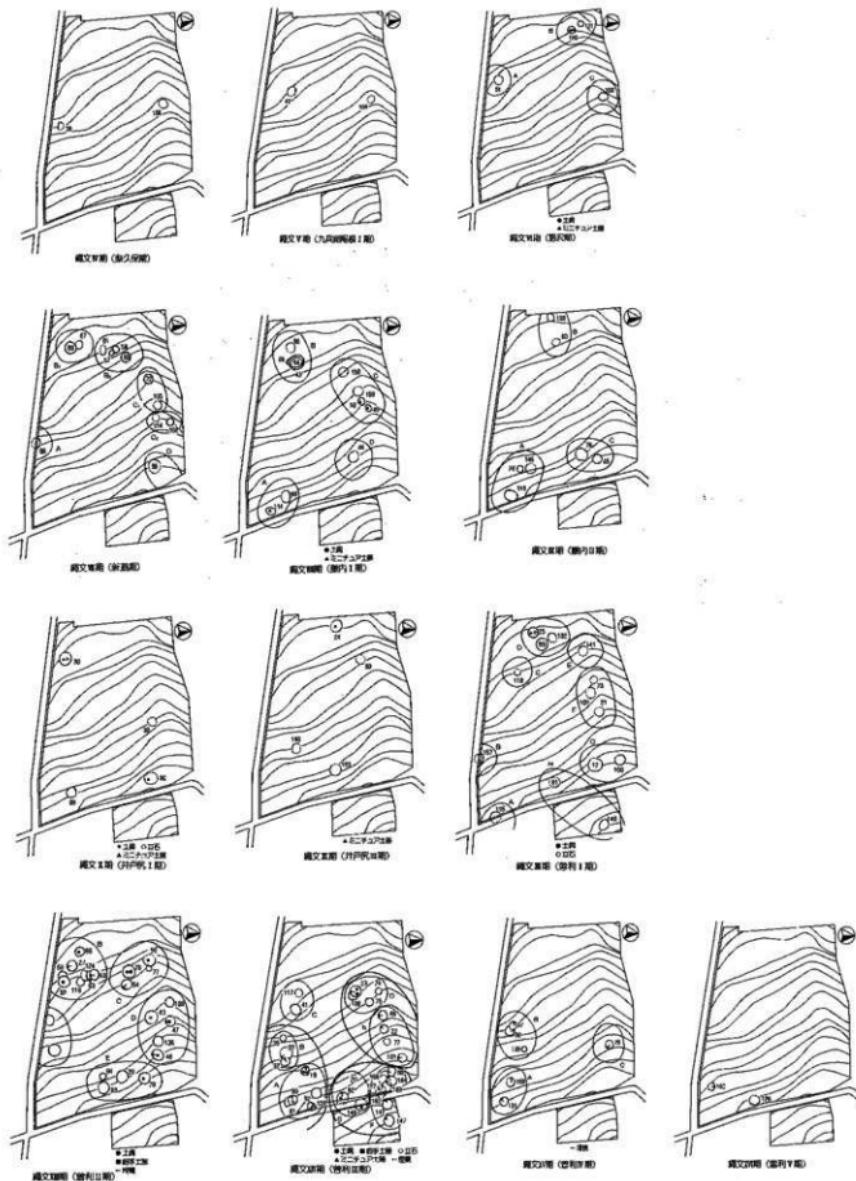
矢口遺跡遺構全体図



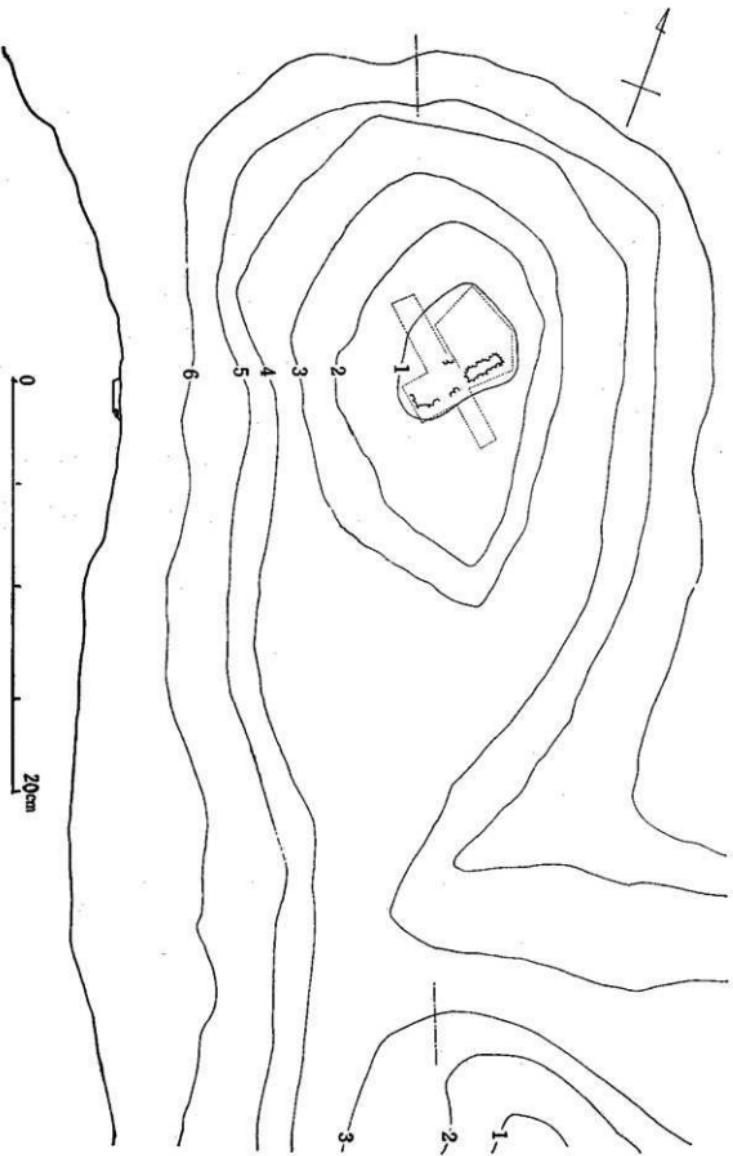
1 他谷 2 離山 3 そり表 4 東小倉 5 南松原 6 長者屋敷 7 仁王門 8 荒海渡 9 莢原 10 麻神
 11 下中原 12 三夜塚 13 原 14 稲村 15 流ノ内 16 洞 17 芦ノ久保 18 鹿久保 19 大日 20 三ヶ組
 21 小段 22 末尾中央 23 平出 24 烧町 25 刹ノ宮 26 墓烟 27 植沢東 28 山ノ神 29 中原 30 鶴原
 31 上木戸 32 丸山 33 雨樋 34 小池 一ツ家 35 南中島 36 山影 37 坪ノ内 38 弥生前 39 林山腰
 40 大村塚田 41 大村立石 42 塚辛 43 川西面田 44 牛の川 (括弧内2003年より)

松本平南半における縄文中期遺跡の分布 (●印…拠点・準拠点集落)

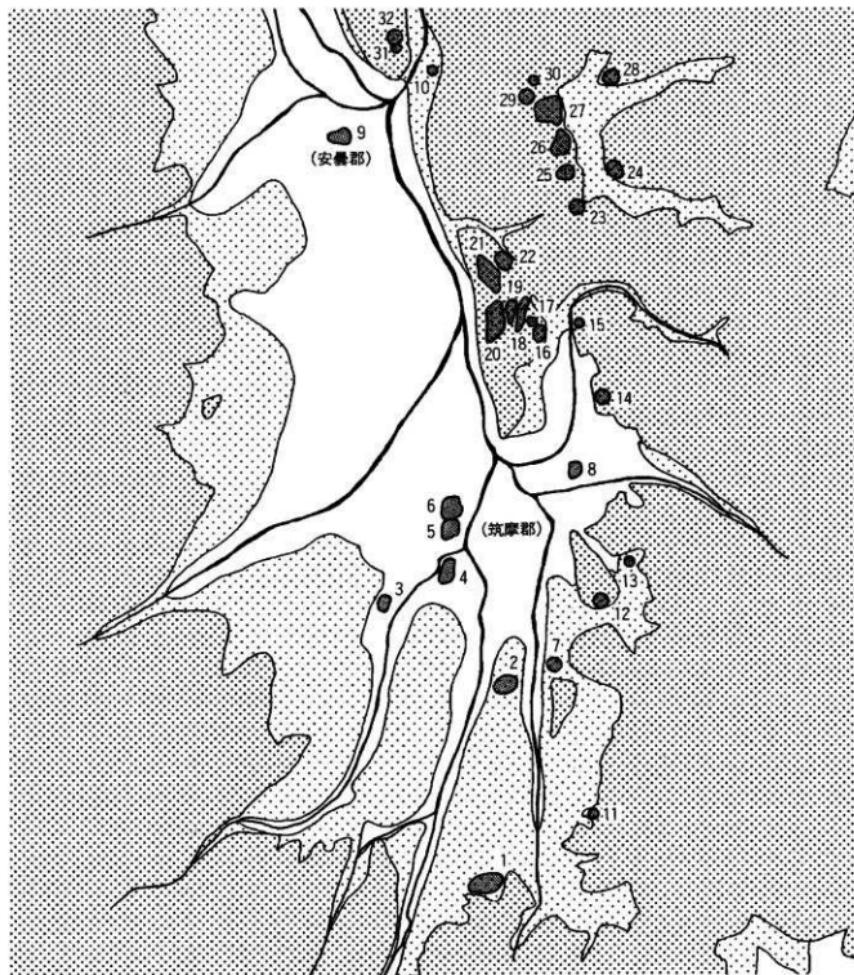
資料-4



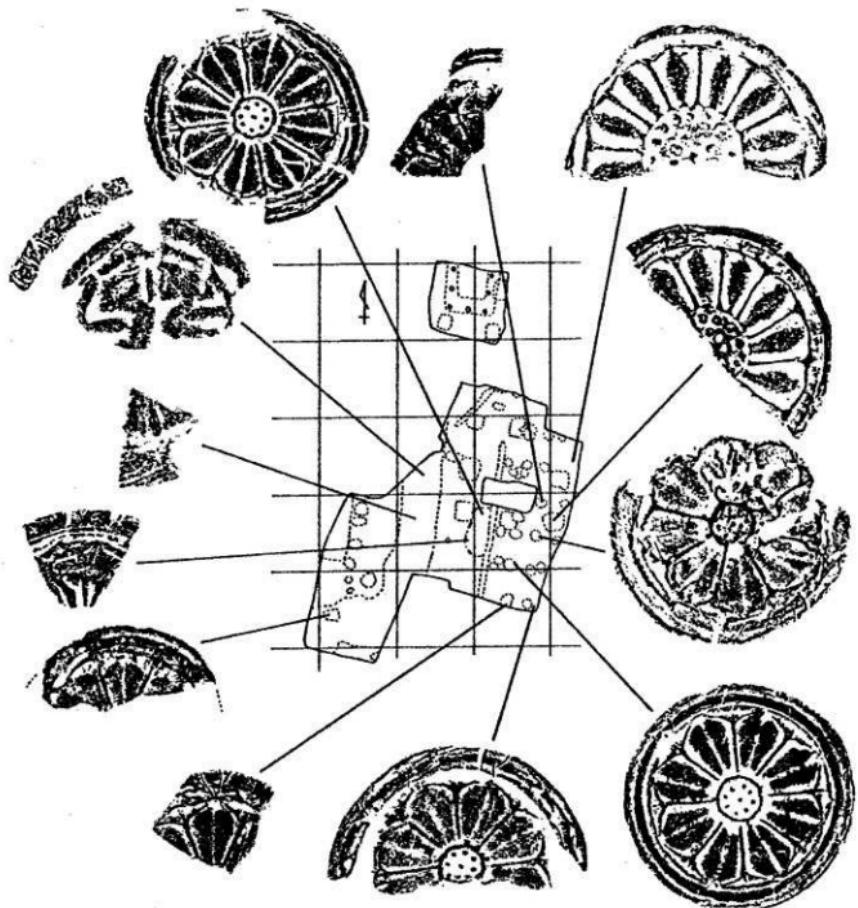
組原遺跡環状集落の変遷



桜ヶ丘古墳の墳丘測量図 (1:400)

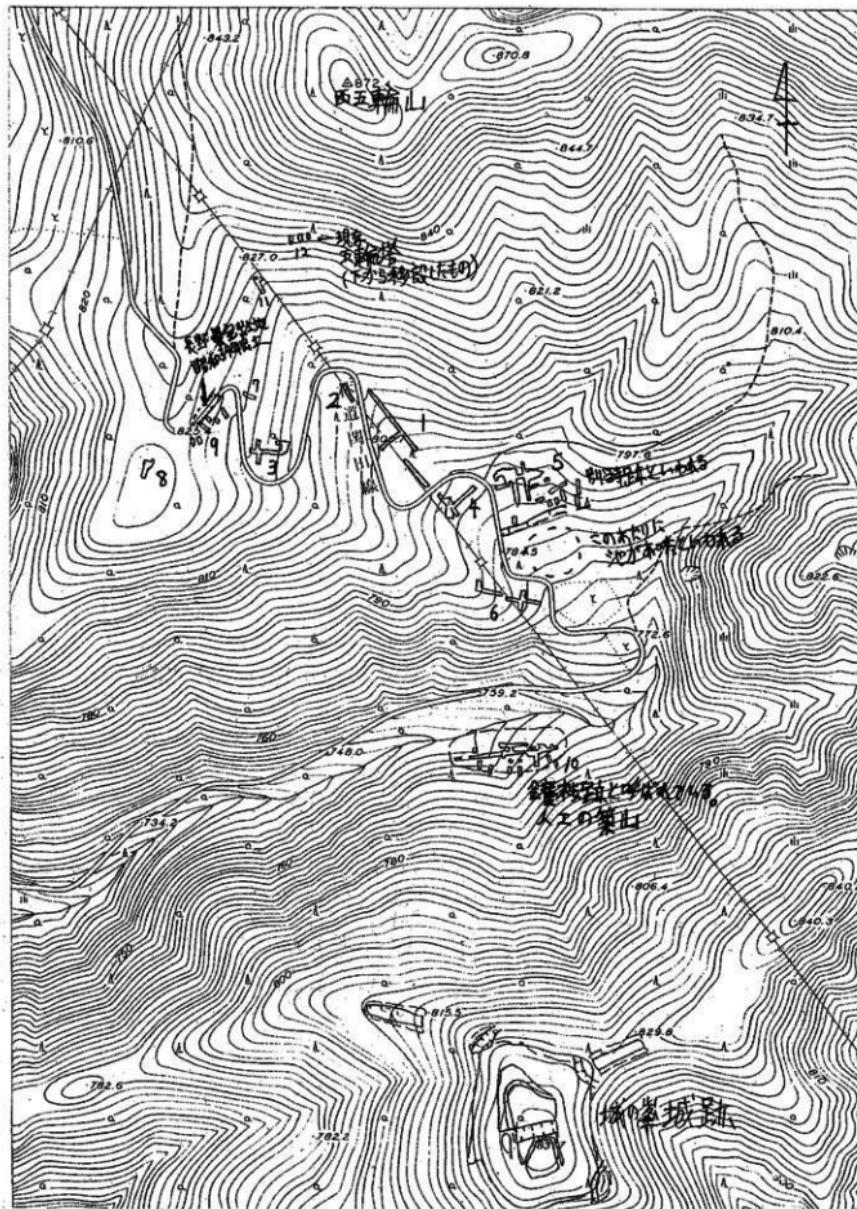


松本平の窓跡の分布



明科庵寺出土軒丸瓦図

資料-8



山寺廃寺跡地形図 (1:2,500)

No.	発照年度 (和暦)	轄管名	施設文書	登録文書
400		芝原日	松本市文化財調査報告No.145	芝原日
401		川内町高野V(阿賀・百目)	松本市文化財調査報告No.162	川内町高野Ⅳ
402		川内町高野V(阿賀・百目)	松本市文化財調査報告No.162	川内町高野Ⅴ
403		三田町伊佐那屋	松本市文化財調査報告No.159	三田町伊佐那屋
404		中山市澤郷161(不動院古墳墓)		中山市澤郷19
405		山川町寺垂	松本市文化財調査報告No.157	山川町寺垂
406		西川町南尻	松本市文化財調査報告No.148	西川町南尻
407		西川町東太		西川町東太
408		西川町大		西川町大
409		西川町V(百目原跡)	松本市文化財調査報告No.151	西川町V
410		山瀬I		山瀬I
411		ヲカヤマ日		ヲカヤマ日
412		平田北堀	松本市文化財調査報告No.152	平田北堀
413		御の谷I	松本市文化財調査報告No.153	御の谷I
414		松本城下町筋 松本城下町筋	松本市文化財調査報告No.154	松本城下町筋
415		松本城下町筋 伊勢町1(A・B(武家屋敷)・火神戸)	松本市文化財調査報告No.149無題	(城)武家屋敷1 天神西1
416		松本城下町筋 伊勢町2(町筋)	松本市文化財調査報告No.149無題	(城)火神戸2
417		松本城下町筋 伊勢町3(町筋)	松本市文化財調査報告No.149無題	(城)伊勢町21
418		松本城下町筋 伊勢町22(町筋)	松本市文化財調査報告No.149無題	(城)伊勢町22
419		松本城下町筋 西廻寺(町筋)		(城)西廻寺1
420		松木城廻道場跡2		松木城廻道場跡2
421		松本城廻道場跡3 六九一(町筋)		(城)天丸1
422		松本城廻道場跡4 六九二(町筋)		(城)天丸2
423		松木城廻道場跡5 六九三(町筋)		(城)天丸3
424	2000 平成12	信州の里高岡V 高岡の里高岡V	ツーパロボ	信州の里高岡5 高岡の里高岡2
425		篠の内川		篠の内川
426		中山古墳群10(小安呂古墳墓)		中山古墳群10
427		中山古墳群11		中山古墳群11
428		中山古墳群12		中山古墳群12
429		新村I		新村I
430		新村II		新村II
431		新田松原町(新興→)	ツーパロボ	新田松原6
432		新社T	松本市文化財調査報告No.159	新社1
433		黒田I(裏)		黒田I(裏)
434		松本城下町筋 伊勢町23(町筋)	松本市文化財調査報告No.154無題	(城)伊勢町23
435		松本城下町筋 伊勢町24(町筋)	松本市文化財調査報告No.154無題	(城)伊勢町24
436		松本城下町筋 伊勢町25(町筋)	松本市文化財調査報告No.154無題	(城)伊勢町25
437		松本城下町筋 六九三(A・B)	松本市文化財調査報告No.160	(城)六九三A (城)六九三B
438	2000~2001 年度12~13	松本城下町筋 六九四(A・B(武家屋敷))・高岡I(上林時代)		(城)上林2 大名町1
439	2000~2001 年度12~13	松本城下町筋 六九五(A・B(武家屋敷))・大名町1(中世)	松本市文化財調査報告No.155	大名町2
440	2001 年度13	久保保原I	松本市文化財調査報告No.161	久保保原1
441	2001	御所南 I	松本市文化財調査報告No.161	御所南1
442		御所南 II	松本市文化財調査報告No.158	御所南2
443		山川西端		山川西
444		中山古墳群13		中山古墳群13
445		西田松原町(松原→)		西田松原7
446		西田松原町		西田松原8
447		他の内畠	松本市文化財調査報告No.164	他の内畠
448		平山木曾呂	松本市文化財調査報告No.166	平山木曾呂4
449		平岡木曾呂V	松本市文化財調査報告No.166	平岡木曾呂5
450		蓬倉池島		蓬倉池島
451		城山屋三		城山屋2
452		高畠I・II	松本市文化財調査報告No.165	高畠町
453		松本城下町筋 久保塚		(城)久保塚2 城下町7
454		松本城下町筋 宇都御前(有坂)	ツーパロボ	宇都御前1
455		松本城下町筋 伊勢町26(町筋)	松本市文化財調査報告No.163無題	(城)伊勢町26
456		松本城下町筋 伊勢町27(町筋)	松本市文化財調査報告No.163	(城)伊勢町27
457		松本城下町筋 伊勢町28(町筋)	松本市文化財調査報告No.163	(城)伊勢町28
458		松本城下町筋第2(外番)	松本市文化財調査報告No.163	外番2
459		松本城下町筋V(外番)		松本城下町筋V(外番)
460	2002 平成14	松本城下町筋 中町3(中町)	松本市文化財調査報告No.171	(城)下草田町1
461		松本城下町筋 御所南I(御所南)		御所南1
462		松本城下町筋 御所南II(御所南)		御所南2
463		松本城下町筋 御所南III(御所南)		御所南3
464		松本城下町筋 東町I(吉井町)	ツーパロボ	(城)吉井1 御所南1
465		御所山古墳址 I		御所山古墳址1
466		北野I・吉井5		北野I 吉井5
467		白瓶寺 I		白瓶寺1
468		北島羽羽目寺		北島羽羽目寺
469		美濃御所官署		美濃御所官署
470		高木I		高木1
471		庵込ノ棚		庵込ノ棚
472		松本城下町筋 の丸堤東北端隣及び工事跡		の丸堤東北端隣及び工事跡
473	2002~2003 平成14~15	松本城下の丸堤東北端隣及び工事跡		の丸堤
474	2002~2003 平成14~15	女鳥羽羽目(丁)		女鳥羽羽目
475	2003 平成15	高畠日・I・II		高畠2
476		西崩日		西崩日
477		猪川日		猪川日
478		松本城下町筋 西崩日(西崩日)		(城)西崩日3
479		松本城下町筋 の丸堤3(武家屋敷)		(城)西崩日3
480		松本城下町筋 六九三(武家屋敷)		(城)六九三
481		慶久ノ脇		慶久ノ脇
482		松本城下町筋・東町I(育園)		(城)東町2
483		北野5号地出井		北野5号地出井
484		北野5号地出井 木曾5(育園)		北野5号地出井
485		松本城下町筋 の丸堤3(武家屋敷)		(城)北野5
486		奥宮寺		奥宮寺
487		大村村		大村1
488		大村村		大村2
489		御金石原・栗山古墳	復元模型	御金石原
490		松本城下町筋	復元模型	松本城下町筋

(下記に付した数字は遺跡番号)

- *1 984高野山(山頂・中山2号古墳)と思われる
*2 984高野山(山頂・中山2号古墳)と思われる
*3 1007御所山古墳(矢作川)と思われる
*4 1017御所山古墳(矢作川)と思われる
*5 1021鹿伏山古墳(矢作川)と思われる
*6 1032御所山古墳(矢作川)と思われる
*7 1033御所山古墳(矢作川)と思われる
*8 1036御所山古墳(矢作川)と思われる
*9 1037御所山古墳(矢作川)と思われる
*10 1038御所山古墳(矢作川)と思われる
*11 1039御所山古墳(矢作川)と思われる
*12 1040御所山古墳(矢作川)と思われる
*13 1041御所山古墳(矢作川)と思われる
*14 1042御所山古墳(矢作川)と思われる
*15 1043御所山古墳(矢作川)と思われる
*16 1044御所山古墳(矢作川)と思われる

掲載写真一覧

No.	題名	開催日	出典	備考
1	バリリストの先生方	3		松本市教育委員会
2	シンボルグム会場風景	3		松本市教育委員会
3	上木名温泉活性化例会	4		大町市教育委員会
4	山の内造園出土土器スライド	4	「山の内造園」 2001年 山形村教育委員会 口絵写真	山形村教育委員会
5	一洋造園出土ヒスイ原石	4		人町山教育委員会
6	エリ穴道石全般	5		板本町教育委員会
7	リバーライン出土製瓦	5		板本町教育委員会
8	御山古墳金物	6		板本町教育委員会
9	御山古墳金物第1	6		板本町教育委員会
10	御山古墳金物第2	6		板本町教育委員会
11	鏡口・仄	13		板本町教育委員会
12	小林房氏	13		板本町教育委員会
13	利木造園出土瓦器	13	「利木造園－カインズホーム旗艦館に伴う監査報告書」 1997年 利木造園委員会 口絵写真	板本町教育委員会
14	島吉哲氏	14		板本町教育委員会
15	山ノ神造園出土トロトロ石器	15	国費アルブマニアの公開展示文化財免許證函告書2 一大町市内の「山ノ神造園」 2003年 岐阜交通局開業式&豊富・長野県総合文化センター 岐阜市	岐阜県文化庁セミナー
16	向陽台造園東石井	16	「一般財団20周年記念バイパス沿線工事歴史文化財免許證函告書」 1998年 尾張市教育委員会 口絵写真	尾張市立平出博物館
17	東近江造園出土扶手耳鉢	17	「愛近江...500年前の瓦器」 製作より「窯の裏面」 1995年 大町市教育委員会 8p上図写真	大町市教育委員会
18	久久石跡・列	17	「阿久屋跡と古文入の史跡」 2000年 長野県立歴史史跡 27p右段	長野県立歴史館
19	安佐山ノ神造園出土屏風風瓦	18	「安佐山ノ神・牛之井・山ヶ武遺跡」 2002年 福井市教育委員会 与兵川廻路 I 上段左	福井市立平出博物館
20	安佐山ノ神造園出土枕形瓦	18	「女尖山ノ神・牛之井・山ヶ武遺跡」 2002年 福井市教育委員会 与兵川廻路 I 上段左	福井市立平出博物館
21	宇山造園風景	19	「史跡 宇山遺跡」 福井市教育委員会 1987年 口絵字画	福井市立平出博物館
22	下山泰氏	19		板本町教育委員会
23	御山造園出土付手前手標	19		板本町教育委員会
24	和田俊哉氏	20		板本町教育委員会
25	寅作草典氏	21		板本町教育委員会
26	川原町造園会全般	21		板本町教育委員会
27	馬鹿造園風景	21	「前原造園」 1996年 温泉市教育委員会 口絵写真	尾張市立平出博物館
28	淀の内造園出土ヒスイ原石・瓦片	23	「淀の内造園」 2001年 山形村教育委員会 図版II	山形村教育委員会
29	一洋造園・瓦	23		大町市教育委員会
30	平出造園出土瓦	24	「松本の上岡」 2002年 福井市立平出博物館 7p上段中	福井市立平出博物館
31	穴木六造園出土土器	24		板本町教育委員会
32	丸山川原造園出土土偶	25		板本町教育委員会
33	六洋造園出土石灯	25		板本町教育委員会
34	柳原信光氏	26		板本町教育委員会
35	石浦造園出土土器	27		板本町教育委員会
36	芦川造園出土石燈	27	「板本町造園－歴史発掘調査報告書(本文編)」 1990年 長野県立本郷ヶ丘高等学校・板本町教育委員会 18p巻33細版上段左	板本町教育委員会
37	大澤辰氏	28		板本町教育委員会
38	ほうちろく造園竹野基上高石造機	28	「ほうちろく造園」 1991年 明井町教育委員会 144p 口絵右	明井町教育委員会
39	利木古道跡出土瓦	29		板本町立平出博物館
40	尾瀬町造園出土瓦	29	「信州の大通路」 1994年 鹿児井町版社 14pカラー図版	尾瀬町立平出博物館
41	秋吉古道出土瓦	29		板本町教育委員会
42	高瀬疋田跡遺跡	30	「板本町高瀬跡－歴史発掘調査報告書」 1994年 板本町教育委員会 写真回数3段	板本町教育委員会
43	中田平岡出土十把鍬	30		板本町教育委員会
44	山田真一氏	31		板本町教育委員会
45	上山兼業群14地区企画	31	「筑摩東山・ト山・菖蒲・高砂跡発掘調査報告書」 図録(写真) 1999年 筑摩町菖蒲遺跡調査委員会 菖蒲町教育委員会 説明42の2	豊科町教育委員会
46	鳥羽駒跡遺跡全般	33	「鳥羽駒跡」 1994年 鳥羽町教育委員会 8p説明4	豊科町教育委員会
47	ほうちろく石燈	34		明井町教育委員会

掲載図版一覧

No.	題名	開催日	出典	備考
1	向陽台造園3号住居庭園	15	「一般財団20周年記念バイパス」(笠置山事業)文化財免許證函告書	福井市立平出博物館
			1994年 福井市教育委員会 252p	
2	剣ノ穴造園・平行四辺形豪華造園	28		赤井川
3	山の内造園石列及び奥庭部分	37	国費アルブマニアの公開展示文化財免許證函告書2 一大町市内の「山の内造園」 2003年 岐阜交通局開業式&豊富・長野県総合文化センター 30p 第199頁	長野県総合文化センター
4	穴口造園豪華全庭園	58	「穴口・齊山の造園」 1994年 福井市教育委員会 12p	福井市立平出博物館
5	松平庄周による鶴の門山庭園の分布	59	「鶴の門山庭園第1次発掘調査報告書」 2003年 松平庄周教育委員会 27p	朝日町教育委員会
6	利木造園出土瓦の風景	60	「利木造園」 1996年 温泉市教育委員会 92~97p	温泉市立教育委員会
7	阿久丘古道の埴生御殿	61	「從良古道占」 1996年 从良古道占・本郷村教育委員会 29p	本郷村教育委員会
8	松木の御殿分布図	62	「筑摩東山・上山・菖蒲・高砂跡発掘調査報告書」 1999年 筑摩町菖蒲遺跡調査委員会・菖蒲町教育委員会 本編	豊科町教育委員会
9	明井町寺子屋新井太郎	63	「明井町寺子屋・個人作生徒等による芸能発表調査報告書」 2000年 明井町教育委員会 33p巻20回	明井町教育委員会
10	山寺魔寺跡地形図	64	「佐木・木暮寺跡遺跡発表会」 2001年 猪谷町教育委員会 20p	猪谷町立平出博物館

松本市立考古博物館リニューアル記念シンポジウム報告書

松本平の発掘を語る。

編 集	松本市教育委員会文化財保護課 〒390-0873 松本市丸の内3番7号 TEL (0263) 34-3000
	松本市立考古博物館 〒390-0823 松本市中山3738番地の1 TEL (0263) 86-4710
発 行	松本市教育委員会
発行日	平成17年3月31日
印 刷	精美堂印刷株式会社

